

SEIJU

2017年
第47卷

冬号

成・寿





横山善三
清三
癸亥



■特集

善光寺留学僧育英会 第三十回記念交歓会

横浜善光寺留学僧育英会は、善光寺二世中興大圓武志大和尚によって昭和五十九年に創設され今年三十回の節目を迎えました。

これを記念した「第三十回記念交歓会」が五月二十八日午後二時から釈迦殿で開かれ、参集した有縁の方々や育英生ら一同で大圓武志大和尚に報恩の誠を捧げ育英会の発展に向け決意を新たにしました。

記念交歓会では、育英会名誉顧問の東香山大乘寺山主・東隆眞老師による基調講演。三十回生を含む十四人の育英生による座談会などが行われ、育英会を創設した大圓武志大和尚に思いを巡らせました。



横浜善光寺留学僧育英会
第三十回記念交歓会



基調講演で東老師は、育英会が設立されて間もない頃を振り返り、「老大和尚から、『育英会は自己満足だ、売名行為だと足を引っ張る人たちがいて、嫌気が差した』と相談を受けたが、『誰が何と言おうとも止めてはいけない、私もできる限りの応援する』と励ましました」と、エピソードを紹介し、「一寺院でこのような快挙を企て、継続しているところはほかにない」と語り、駒澤大学で共に学んだ学友である大圓和尚を讃えました。

続いて行われた育英生による座談会には、十四人が登壇、母国での体験や育英生として派遣された各国での経験を語り合った。

この中で、現在は南カリフォルニア大学で准教授を務めているウィリアム・ダンカンさん（第十四回生）は、「黒田老師は、エネルギーに満ちた方でした。自分だけの道を発見すること、



第三十回育英生

右：肖越氏

左：サンヴィド・マルタ氏



大きく前に出ることを教えていただきました。」と話し、大圓大和尚の支援に謝意を示しながら、遺風を偲びました。

現・育英会理事長の黒田博志住職は、座談会後の挨拶で、「第三十回生を含め、留学僧育英生は一三二名を数えます。本日は、育成生の皆様やご支援を頂いている皆様と共に、初代理事長である師父に感謝報恩の誠を捧げることができましたことを心より感謝申し上げます。中国の古典に『一年先を見る者は花を育てる。十年先を見る者は樹を育てる。百年先を見る者は人を育てる』とあります。不肖ながら師父の理念を継承し、百年先を見据え、仏法に基づく人材育成に精進して参る所存です」と謝辞を述べました。

また、挨拶の中で黒田住職は、第三十回を記念してまとめた冊子『法の華は人によりて開く』が刊行されたことを報告しました。



カラー特集■善光寺留学僧育英会 第三十回記念交歓会……………					1
基調講演●留学僧英会第三十回を祝して……………				東 隆眞	10
●第二部 留学僧座談会……………					19
連 載●『普勸坐禅儀』に学ぶ その十一……………				安藤 嘉則	46
法 話●春彼岸会 彼岸へのお唱え……………				渡邊 清徳	54
法 話●秋彼岸会 不完全な自分自身を自覚して……………				水庭 浩章	70
カラ ー■一斉法要 大本山永平寺参拝……………					85
●大本山永平寺参拝〜大圓武志大和尚入祖堂法要〜……………					91
アーカイブ■世界に活眼を開く人材を育成したい (庭野立正俊成会会長と対談)……………					100
●ニュースアラカルト……………					110
●善光寺霊園ニュース……………					122
お知らせ●留学僧募集、毎月の催事……………					130
「論語からのお話」参加者の声……………	140	育英会寄付……………	146	読者のたより……………	148
				編集後記……………	156
				題字・イラスト 伊藤三喜庵……………	

巻頭言

善光寺住職 黒田博志

「仏道を通して、世界の安心・平和・幸福に寄与する人材を育てる」の大誓願のもと、師父、大圓武志大和尚が善光寺開創十五周年を記念して設立した「善光寺海外留学僧派遣育英会」も本年第三十回を迎えることが出来ました。これもひとえに仏天のご加護、檀信徒の皆さま、ご縁の方々のお力添えのおかげであります。心より篤く感謝申し上げます。

師父は檀信徒の皆さまに「毎食一口減らしその分を将来、仏教興隆を担う人材育成のためにご浄財をご喜捨していただきたい」と呼びかけ、それに応えて下さ

り、まさに寺檀一体となり今日に至ります。この間、留学僧育英生は百三十名となり、国内はもとより世界各地でめざましいご活躍をしております。

この機に、当会理事で第六回育英生でもある駒沢女子大学安藤嘉則教授の発案により、育英生各々に留学先で得た経験や活躍の様子などをお話し頂く記念交歓会が五月二十八日に執り行われました。

当日は初代理事長に対する報恩供養ののち、設立当初より公私共にご尽力賜っている当会名誉顧問、加賀大乘寺山主東隆眞老師による基調講演。さらに国内外より参集された育英生の方々と育英会の意義、初代理事長の遺志を改めて再認識し、次代に継続するために何をなすべきかを語り合う事が出来ました。

同じく五月に、檀信徒の皆さまと大本山永平寺並びに御誕生寺に参詣致しました。永平寺では入祖堂法要にて師父の位牌を承陽殿に納めさせて頂きました。また、御誕生寺では元總持寺貫首板橋興宗禅師さまより温かいおもてなしとご法話まで戴き、有り難い報恩感謝のまことを尽す参拝旅行となりました。

改めて師父の遺した足跡、その大きさを思い知らされた一年でありました。

「只しかんたざ管打坐」（ただひたすらに坐る）

永平寺を開かれた道元禪師さまのお示しです。

坐禅は正師を見つけ黙って十年坐る。十年坐ったらもう十年。二十年坐ったらさらに十年といわれ、三十年坐って初めて見えてくるものがあると教わりました。

私自身、二十一年前、永平寺の門を叩き、僧侶としての道を歩み始めました。それから十年経たずに正師である師父を失い、お寺を護る重責に押しつぶされうになった時もありました。それでも師父の遺してくれた善光寺、ご縁の皆さま、諸老師方、檀信徒の皆さまに支えられ、皆さまを師と仰ぎ十二年余り過すごして参りました。

おかげさまで、お寺では各種行事や参禅会、写経会や論語教室、書道教室、華道教室もご縁の方々に浸透して参りました。新たに御詠歌教室もはじまり、共に

お釈迦さまのみ教えを学び楽しくお唱えしております。有難いことです。

大圓大和尚の

『法燈高く耀く善光寺 仏徳常に開く成寿の山』

を信念とし、皆さまとともに、仏法に親しみ、心やすらかに日々を過ごしていただけるように精進して参ります。

今後ともご指導ご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

留学僧育英会第三十回を祝して

大乘寺山主 東 隆眞老師

(育英会名誉顧問)

ただ今ご紹介いただきました金沢市大乘寺の東隆眞でございます。

このたびは横浜善光寺留学僧育英会、その育英生派遣が、三十回を迎えるということで誠におめでたい限りでございます。なにかお話をしてくれという博志老師のご依頼を頂きました。ご存知かと思いますが私は、数年前から腰を痛めておりまして、大分よくなっておるのですが、まだ完全に治っておりませんので、皆様に大変無様な格好をお見せしております。が、このご依頼は嬉しくて、よろこんで参上したような次

第であります。

すでに『法の華は人によりて開く』に書いておきましたが、この育英会の創立当初、黒田武志老師は奥様とお二人で私がおりました世田谷の駒澤学園へおいでになりました。

黒田老師いわく「せっかく立ち上げた育英会ですが、もうやめようと思う。と言うのも表では『黒田さんはいいことをしているな』『すばらしいな』と言いながら、裏では、『黒田のやっていることは自己満足だ、売名行為だ、いい気になっている』そう言って足を引っ張ってい



る人がいるんだよ、すっかり嫌気がさしてしま
った」と黒田さんはそう言うんです。

で、私は「なにを言ってるんだ。あなたのや
っていることは実にすばらしいことなんだ。だ
れもやっていないことなんだ。だからもう一度
考えてみてくださいよ。私もできるかぎり陰な
がら応援したいと思う」と。

「そうかな。それじゃ考えてみよう」そう言

ってお帰りになったのであります。

そのことと前後して、私の学問上の恩師であ
ります小川弘貫先生からこういうことを言われ
ました。「おい、東君、人の世話をしたってね、
せいぜい後ろ足で砂をぶっかけられていくのが
通例なんだよ。な、そのことをよく心得ておけ
よ」と。小川弘貫先生というのは渋谷あたりで
毎晩切った張ったの大げんかをくりかえしてい
る駒澤大学の学生も小川先生の名前を聞くとひ
れ伏して頭をこすりつけて「先生、先生」とい
うような方でした。

そして一方、駒澤学園に鎌田茂雄先生という
先生がいました。私の兄貴分になりますが、小
川先生に「鎌田、お前は東大へ行け」と言われ
て、「はい」と二つ返事で勉強して、駒澤大学
を卒業して東大に行き、後に東大の教授になり
ました。『中国仏教史』、その他、等身大の著書
があります。岩波書店から出しました『中国仏

『教史』は七巻くらいあったと思います。日本学士院賞も受けまして、もし生きておられれば、八十五、六歳ですが、恐らく文化勲章を受けられたに違いないと思います。すごい人がいるんですよ。

この鎌田さんも小川先生のお弟子でありました。小川先生はおだやかで、おとなしい、やさしい先生なのです。が、なぜか先生の前に出ると誰でも借りてきた猫のようにおとなしくなるんですよ。小川先生はずいぶん人の面倒をみられました。私も面倒をみてもらった一人であります。小川先生は若い人を育てるのに破格の扱いで面倒をみられた方なんです。もうあんな先生はほかにいないでしょう。あんな先生は後にも先にも私は見たことはありません。その先生がそう言うんですよ。「どんなに人の世話をしてもせいぜい後ろ足で砂をぶっかけられていくのが関の山だよ」と。そのことを覚悟しておけ

よ、と。こう言われたことを黒田さんの話と一緒に、私はよく思い起こすのであります。

ですから私は黒田老師の誓願によって創設された、この育英会、それによって助けられた方々が、各方面にたくさんいらっしゃいます。そして育英金をいただいた人は今後どうかひとつ黒田老師のお気持ちを受け継いで、若い人を助けてあげる、育ててあげる。そういうことに力を尽くしていただきたいと願っております。

それからもう一つ。黒田老師は「宗祖を通して釈尊に帰る」ということをよく仰いました。それが誓願でありました。黒田老師は、他にも誓願を抱いていらっしゃいましたが、あまり人が知らないことを申し上げます。

岩手県の盛岡市のお寺様、私はどんなお寺だか存じ上げませんが、そのお寺様に黒田老師はお仏舎利を贈呈されているという記録を見まし



昭和五十九年一月十五日
留学生制度設立準備委員
会にて



た。

数年前に私は金沢医療センターに一ヶ月ばかり入院したんですが、そのときの主治医の太田安彦先生が真如苑の信者さんだったんです。私が太田先生といろいろ話をしているうちに黒田老師に行き当たりました。どういうことかといいますが、そのころ曹洞宗の管長・高階禪師様の名代で黒田老師がタイのお仏舎利を真如苑にお届けになっていたのですね。その時の写真をご覧になって「東さんはこの方と友達だったのですか!」と、すっかりびっくりされてしまいました。大乗寺に二度、三度、黒田老師のためにお参りになったことがあります。これもお仏舎利の御縁だと思っています。

私は平成五年四月、タイのワット・パクナムに黒田老師のご案内で参りました。そして、そこでお仏舎利を頂いたのであります。十二、三粒頂いたかと思えます。お釈迦様の像もありま

して頂きました。というのは副住職が日本人だったのです。そういうことで頂いて持つて帰りまして、今もお祀りしております。

その十二、三粒の中で、三粒ばかり駒澤学園の学園長や、私の親友、私の義理の弟のお寺に収めました。あと十粒ほど私のところにあります。私は、「大乘寺にお仏舍利塔を建てたい」こういう念願を持っております。これは大変なことでありませけれども、この念願が実現しようとするまいと、私は固く心に留めて、それをなんとか実現したいというふうに思っているのです。あります。

大乘寺にお仏舍利塔ができますと、金沢のどこからも見えるような高いところにありますから、すばらしいと思うんですね。現にそういうものをお作りになるなら、私はそこに入りたいというおばあちゃんも何人かいらっしやいます。まあ、そういうことで黒田老師はお仏舍利につ

いても深い深い御縁があるんだということを通して上げたいのでございます。

それからもうひとつ最後に申し上げたいのは、三、四年前に私は大乘寺に世界禅センターというのをつくりました。それは世界各地からお招きいただき、これまで中国・韓国・台湾はもとより去年はオランダに参りました。来年はネパールへ行くことになっています。

皆様、今、大乘寺の世界禅センターには、年間二、三百人の外国人の参禅者が来るんですよ。先日も五十歳過ぎのイスラエルの女性でユダヤ教徒の方が大乘寺に来て約二週間、朝早くから起きて坐禅をしていました。

その女性に「あなたは世界禅センターのイスラエル局長になつてくれ」と言いますと、即座に「はい、わかりました。それでは何か証拠を下さい」と言いますから、この絡子を差し上げ

たのであります。

いずれにしましても、たくさんの方が来るんですよ。つまりそれだけ多くの外国人が仏教、坐禅というものに非常な関心をもっているという、ことであります。これからは、外国人専用の寄宿舎を設け、外国人専任の語学に堪能な指導者を養成して、こうした外国人を迎え入れ、坐禅の指導にあたる。そういう必要が絶対にあると思います。いかがでしょうか？

私には、現に三人ばかり、外国人の女性の弟子がおります。一人はイタリア・フィレンツェの真如寺という寺におります。ついこの間、侍者和尚が帰ってきたばかりです。

それから現在ここの育英生にさせていたでいて、そして頑張っております、アゼルバイジャン出身の女性です。金沢大学のドクターコースを出て医学博士の学位を取得して、金沢大学の

専任教員をやっております。二、三日後にはアメリカの大学の要請で出張することになっていきます。アイーダ・ママドバといっています。

あともう一人はアルゼンチンのエミール・ロミーナという女性です。日本へ来て、京都の禅寺をはじめいろんなところに行きますけれど、いまひとつ、どうも満足できないというんです。しっくりこないというのです。

そして挙げ句の果てに大乘寺に来るのです。で、やっと落ち着いたということです。

この間オランダに行ったときもライデン大学の女子学生が二名宿舎に訪ねてきました。三十分乗り物に乗って、さらに三十分歩いて来てくれました。それくらい熱心なんですよ。

そういう状況を知らないとかやがて、二、三十年後には、仏教というのは、坐禅というのは、中心地がアメリカやヨーロッパに移ってしまうでしょう。もちろん中心地がどこへ移ったって



いいんですけれども、我々日本人の僧侶としては残念ではないか、そんなことを感じております。

そういうことを背景に感じて、世界禅センターをつくっておるわけですが、それも元はといえば、黒田老師、兄上様の前角老師、こういう優れた優れた先覚者がおられたので、その影響

を直接間接に私は受けていることに間違いはありません。そのことを申し上げさせていただきまして今日のお話を終わらせていただきたく思います。

なお、この横浜善光寺留学僧育英会というのは第二代・博志老師によって受け継がれて、発展を続けています。一ヶ寺でこういう催しを行っているお寺は善光寺様だけでしょう。

このお寺（善光寺）は素晴らしいなということで、かつて東京の中野区の成願寺の小林貢人さんというご住職が見えました。私もそのとき来ておりました。そして黒田老師からいろいろお話を聞いて帰られました。

その後、成願寺様は成願寺様流の育英会……成願寺学術研究振興基金「小笹会」……つまり仏教を勉強する人たちの励ましの会をつくっておられることも申し添えておきたいと思っております。

大変どうも失礼いたしました。

最後になりますが、この育英会をいろいろな
かたちで物心両面から支えておられる善光寺様
の檀信徒の皆様には厚く厚く御礼を申し上げます。
また、裏方として先代黒田老師、そして現在の
第二代黒田老師とともに御尽力いただいている
先代御令室・当代御母堂の倫子夫人に甚深なる
謝意を表し、今後とも御健勝であられんことを
もっぱらお祈りいたします。
ありがとうございます。



昭和六十三年
第三回総会会議にて

昭和六十三年八月二十三日第三回
善光寺海外留学僧派遣育英会総会



昭和六十一年
留学僧総会

平成六年三月三十日十周年記念式典



■第二部 座談会

司会 安藤嘉則（第六回生）
育英生 安井隆同（第二・三回生）

宇野恭章（第十一・十二回生）

真野大成（第十四・十五回生）

山本浄月（第五回生）

伊藤康心（第二十三回生）

胡建明（第五回生）

島崎義孝（第三・四回生）

岩波弘道（第三回生）

ヴィマラワンサ（第九回生）

引田弘道（第三回生）

ウイリアム・ダンカン（第十四回生）

サンヴィド・マルタ（第三十回生）

スターヘル圓成（第十八回生）

磯村啓子（第三・四回生）

（敬称略）





司会 本日は横浜善光寺留学僧育英会第三十回記念交歓会にお集まりいただき、ありがとうございます。第二部は座談会

として、育英生の皆様にお話を頂きます。育英生は今年の第三十回生で百三十二名となりました。二十五ヶ国及び二地域の方々です。本日はタイの寺院やアメリカの禅センターなどで修行された方々、イギリス、ドイツ、インドなどに留学された方、また海外から日本の大学や寺院で参学された方々などを集めての座談会を行います。現在はそれぞれの方々は寺院や大学において教化・教育にご活躍なさっておられます。このような素晴らしい方々をこの横浜善光寺留学僧育英会が輩出したのだということがおわかりいただけると思います。

この他にもまだまだたくさん人材がいらつしやるのですが、本日は十四名の元育英生をお迎えいたしました。それぞれの留学期間に得たものは何だったのか、または異文化に接して印象的なことは何か、等について語っていただきました。と思います。それでは安井様からお願いいたします。



安井 ありがとうございます。第二回のございます。第二回の昭和六十一年と六十二年に育英生に採用され、奨学金を頂戴させていただきました。

井です。私はインドのカルカッタ大学で原始仏教哲学を研究するために博士課程に昭和五十八年から行っていました。昭和六十年に第一期育英生の梅田尚平さんがタイのワットパクナムか

らの帰りにお釈迦さんの覚られたブツタガヤの大塔に黄色い衣を着て歩いていらしたんですわ。十二月八日でしたわ。私も大塔のお参りして草の上に座っていたら、歩き方で日本人はだいたいわかるので気になってちよつと話をしたら、「横浜の善光寺という寺で留学僧育英会が

できてその一期生でパクナムに来了。日本に帰る前に是非お釈迦様のところにお参りに来たいと思うて来た」と、そう言わはるんですわ。それでその時、この育英会のことを詳しく聞いて、それやったら私も是非いつペン応募しようかと、インドから善光寺の方丈さんに手紙を書いたんです。そしたら理事會に諮るから論文を送れということ、送りましたら、あなたを留学僧に決定しましたと。何年でもいいから、好きなことをやってきなさいとのことでした。嬉しかったですわ。インドに來た当初は二、三年のつもりでいたけど、四年目と五年目は善光寺さ

んの奨学金をいただいて研究させていただきました。

ところで私の本当の目的は原始仏教についての研究じゃなくて、お釈迦さんの聖地を村から村を全部歩いて行脚してお釈迦さんと対座して本当の仏教って何なのかを知りたかつたんです。でも学問を超えた世界でそれを求めていくためには、どこかきちつとしたところに席をおかんのだめだということで、カルカッタ大学に縁があつて、研究させていただきました。そして時間をみてお釈迦さんの聖地を網代笠かぶって錫杖もつて村から村へずつと行脚させていただきました。それで論文も書かずに「先生、これで帰りますわ」というたら指導教授がまたえらい人でね。「安井君、あんたこれだけやっただから、なんでもいいから論文書け。君やったら書けるはずやから」と。いや、英語もあんまりやしなーと思つたけど、指導教授は「わし

が何でも手伝うからは是非なんでもいいから書いてくれ」と。それで、論文も書かせていただきました。

それでわかったのは、お釈迦様は思想家でも哲学者でもない。仏法はお釈迦さんの思想でもないし、哲学でもないし、学問でもないということです。お釈迦様はあくまで、仏道を求めて、生涯求道者として仏道をただひたすらに歩まれた方のような気がしました。だから今の日本の仏教界がどうも行き詰まっているのは、あまりにも学問に偏りすぎて、学問的になりすぎて、仏道を実践して歩む人が本当に少なくなつたからだと思います。そこに日本の仏教界の大きな現状の課題があると思います。だから仏教は道を歩む人が大切です。歩んだら道のないところに道ができます。だから今の日本の仏教界は、「学栄えて道滅ぶ」気がしています。だから私はあくまで求道者で道を歩む人でありた

い、そういう宗教者でありたいし、一生求道者でありたいです。ありがとうございます。



宇野 私も実は安井先生が「君はインドに行かなくちゃいけない」ということで、紹介していただいてインドに行くことが

出来たんです。今、安井先生が大変情熱的に話をして下さいましたが、私はこの世で何が大事かというと本当に「ご縁」だと思っんです。ご縁があつて感謝の心があつてそして寛容であることが大事です。そういう気持ちがあれば争いは起こりませんし、みんな許して、こういう奴だからしょうがないかということでもいいと思います。私もそういうことで生かされてるよな気が今になってしています。感謝があれば

戦争も起こらない。テロとかそういうことを私は考えられません。感謝の気持ちさえあれば。仏教というのは唯一争いをしない宗教だと信じていますし、私もそれを実践していきたいと思っています。



真野 私は一九九七年から二〇〇三年まで六年間になりますけど、タイとミャンマーの方へ上座部の勉強に行ってきましたし

た。その間、第十四回と第十五回の育英生として奨学金をいただきました。大変お世話になりました。上座部仏教の修行は、日本の仏教とは大きく違います。本来、仏教の修行は楽しいものです。学べば学ぶほど心は自由に解き放たれていきます。そして、その楽しさ、清々しさが

修行者のさらなる高みを目指す原動力にもなっています。私は、このタイ・ミャンマーでの修行、修習の経験を経て、人格までも一変し、今でも心はタイやミャンマーに行ったなりになっております。ありがとうございました。



山本 私はタイのワットパクナムに行かせて頂きました。ワットパクナムの安居の時は真面目におりましたけど、その後

はあちこち行かせてもらいました。スリランカやインドやネパールなどあちらこちらに行き、いろんなことを経験しました。冊子にも書きましたけれど、人は誰も生まれるところを選んで生まれたいし、人種も選んで生まれたいし、国も選んで生まれて来ませんね。環境だって選ん

で生まれて来ませんからみんな同じなんですよ。だからどんな方とも仲良くなりまして、いろんな方にあちらこちら連れてっていただきます。スリランカに行きましたし、インドでは普通は行かないようなところにも連れて行ってもらいました。インドは一九四七年に独立し、その後本当にすごい勢いです。一世代二世代はカースト制のために貧しかったけれど、今は三世代ですね。この方たちはちゃんと学校に行けるようになりまして、IT産業でも大切な役割を担っていますよね。二十一世紀はインドの時代ともいわれます。このように人類というのは環境によって変わっていくものなんです。同じ地球に生まれ合わせてどこにも逃げられませんからね。

現在も人を差別したり戦争したりしていますが、そういうことじゃなくて本当にこの狭い地球で生きて行くためには同じ人間だという哲学

から変えなければいけないと思っております。そういうことをいろんな経験から学びました。ありがとうございます。



ました。

伊藤 私もタイのワットパクナムに安居させてもらいました。私の時はちょうどタイの内乱が激化して渡航が半年延び

タイはご承知の通り仏教国。男性は成人になると一旦僧侶となる通過儀礼があり、私の同級生で一緒に寺に入ったのは五十名程。多くが三ヶ月で還俗します。一年後には三人になりました。日本人の先輩僧侶もいたので、寄生虫のように付いて回り色々体験させてもらいました。詳しくは冊子を見て下さい。貴重な機会

を与えて下さった善光寺育英会をはじめすべての皆様に感謝します。



胡 僕は善光寺では大変お世話になりました。特に僕はドイツのハンブルク大学に一年行かせていただきました。日本に

戻って善光寺で皆さんとお手伝いをやってきました。日本にいる時間は中国よりもずっと長くなりました。一番感じたのは育英生として見ていて、黒田武志老師、それと桐ヶ谷寺の方丈様、また黒田家のみなさん、つくづくやっぱり黒田一族は海外に力をいれているなあと本当に感心しました。今年ロサンゼルスの前角老師が開創した禅道場にも行きました。改めてそのことを感じました。先ほど東老師も世界禅七

ンターについておっしゃっていましたが、まさにZENというものが世界に通用する共通の言語だと考えています。

僕は中国の天童寺から来て今年で二十八年になりますので、そろそろ故郷に帰る念も起こしていますが、僕を必要としているところがあれば頑張りたいと思います。昔、黒田老師が「四分の光陰が三分過ぎた」と云われました。そういう風に思うと僕は若い時は「生老病死」のことが何か解らなかつたけれど、人間必ずそういう四段階を経過しなければいけないと感じています。自分も五十二歳になって段々体力が落ちてきましたけれど、この善光寺に初めて来た頃は善光寺先代方丈さんもまだ六十歳前でしたから、すごく元気で、今も思いますが非常に懐かしく思います。皆様も非常に元気そうで、ここに来ると、いろいろ楽しい思い出が蘇るんですね。僕にとっても思い出深い場所なんです。

す。

黒田老師のエネルギーをいただいて、世界のために禅の普及をなにかしように思っているんですけど、なかなかまだ出来ていなくて黒田老師に対して恥ずかしい思いがあります。自分の抱負というよりも、いただいたご恩に報いることができていないことが非常に慚愧に思うところです。これからもう少し頑張っていきたいと思います。



島崎 臨済宗妙心寺派の島崎と申します。先ほど東老師が、「人の世話をしても後ろ足で砂をかけていく」とおっしゃら

れていたのを聞いて、先代武志老師が「おっさんには何も期待しとらん」といわれたのを思い

出しました。私が善光寺の育英会とご縁を頂いたのは、臨済宗の紫野大徳寺の道場から花園大学に非常勤でこないかといわれ、行ったところ二年経ってもずっと非常勤で全然常勤にしてくれないなあと思ってる時に、『中外日報』でこの留学僧の募集が出ていたのがきっかけです。その募集を見まして、こんなんでいいのかなあと思いつつも論文を書きました。まあ経緯は色々ありましたけど無事に採用していただきました。

私の修士論文はアメリカの市民宗教というものをテーマにしました。今はトランプ騒動と云ってごちゃごちゃとしますけど、アメリカの宗教とはどんなものか、もともと人工的な国ですから、国民全体が心を寄せるために何か必要だろうということ、その一つコアになっている市民宗教を研究しました。当時ちよつとは熱も冷めていたんでしょうけれど、カウンター・

カルチャーというものがありません。いわゆるWASP（ワस्प）、ホワイト・アグロサクソン・プロテスタント、そういう既成の人たちにアンチする動きがあり、その対抗反応の一つがいわゆるZENでした。

当時花園大学の学長である山田無文老師がお弟子さんのいるアメリカやメキシコなど方々のセンターを視察されて帰ってこられた後の談話で「あっちの禪がホンモノじゃ、悩みのない日本人の修行」こういうことをおっしゃった。これでは、いかんと思ひ、まあ少なくとも仏飯を頂戴して育ててもらって、ただ衣着て、あたま丸めただけじゃ申し訳ないという思いが私なりに致しました。幸いに育英生として採用していただき先代方丈さま、またとりわけアメリカに滞在中は前角老師が差配をしてくださいまして、「いい勉強をしていきなさい」と。随分臨濟宗にも親和感をもっておられ、ご指導頂きま

した。今この二人の老師を思い出すだけでも、ちよつと目頭がウルウルとしますけれども、本当にお世話になりました。今後ともこの育英会が発展されて、なんらかの形でわたしらも社会貢献を微力ながらできればと思っております。



岩波 曹洞宗の岩波弘道と申します。今お話された島崎師と一緒に、前角博雄老師が禪センターに戻られるのにくつつい

て行く形で渡米したのが最初の海外でした。しばらく島崎師と一緒に行動したのですか、途中から別スケジュールになり、私の場合は都合一年半。昭和六十二年（一九八七）四月に渡米して翌一九八八年十二月に帰国しました。その間、LA禪センターやニューヨークのジョン大道口

リー老師の禪マウンテン・モナストリーなどに滞在しました。今振り返っても育英会のこのような立派な先生方の中で、なぜ私が採用されたのかと不思議に思っております。少しの恩返しも出来ていませんが、草創期の頃だったからでしょうか、黒田老師からすれば、私のような者でも育英生としていけるんだという一つの自信を深めてもらえるステップにはなったのかなと勝手に思っております。みなさんご承知ですが、この育英会を始める時の逸話として黒田武士老師がお檀家の皆様に、「どうか皆様毎日一口ずつご飯を我慢してください。それを私共にお預け下さい。そして新しい留学僧のシステムをつくるんです」と、そのようにおっしゃっていました。その結果がこの私かと思うと申し訳ない気持ちがありますけれども何らかの形でお返しできればと考えています。

留学で得たものとして印象に残っている出来

事はLA禅センターにいるときに、メンバーではないんですけども、ヨーロッパ出身の女性がしばらく滞在していました。みなさん禅宗寺でご存知ですかね。禅センターとは別に曹洞宗のオフィシャルに作られているいわゆる前線基地なのですが、その日禅宗寺でお葬式があるという話を聞きつけて、その女性が「私も見たい」といって、純粹に宗教的な興味で見学させてくれなにかということ、OKをもらったんですね。それを聞いて私も余計な事とは思ったのですけれど、私にとつて葬儀とは、極めてプライベートのものだと思ってしまうので、「葬儀は親族や関係者が参列するもので、それを物見遊山とまでは言わないまでも、興味本位で全く縁のない人が出るのはいかがなものか、そういうものは遠慮するものだよ」と言ったら、私のつたない英語が伝わらなかったのか、「なぜだ、私は先生に許可をもらった。あの人はOKといった、

なんで行ってはいけないんだ！」と怒られて、結果的にどうなったかはちよつと覚えてないんですけど、私もうまく説明しきれなかった事を思い出しました。つまりは良い悪いというよりも、いろんな考え方があるんだと教わりました。許可とつてOKももらったんだからいいのだ、という考えもありますし、最近話題になっている付度じゃないですけど、ここは身を引くべきだという考え方もある。いずれにしても自分が絶対だと思っていたことが、まさに郷に入るとは郷に従えで、絶対ではないのだということを経験させてもらいました。

今の話はその一端であります、そういう目には見えないものをいろいろ吸収させていたというところが私の得たものと、そのように考えた次第です。



ヴィマラワンサ ス
リランカから参りま
したヴィマラワンサ
です。私は愛知学院
大学で勉強してい
て、当時本当に生活

するのが大変でした。前田惠學先生に、タイ、ミャンマー、スリランカ、その三つの国にいてフィールドワークとして瞑想のことを研究して帰って欲しいと言われ、引田先生の紹介で育英生になることができました。そのおかげで博士課程に入ることができました。黒田先生よりいただいた奨学金のおかげで私はよく勉強することができました。本当に感謝しております。私がスリランカに帰るとき、日本で印象に残ったことはいっぱいありました。それは日本人は時間をちゃんと守っていること、ちゃんと仕事をやっていること、そういうことが私の印象

に残っていたわけですが、その他にもっといろいろなことがあったのですが、その事をスリランカに帰ってから、私の民族の為にどうやって教えたらいいかということを考えたのです。けれど一般の大人に言ってもうまくいかなかった。

それで私のお寺で幼稚園を始めました。大人になつてから何か教えても難しいから小さい時からと思つて、幼稚園の子供に日本のやり方、挨拶とか時間を守ることとか簡単なことから教え始めました。私はいま二つ幼稚園をやっています。一つはお寺でやっているけれども、もう一つは田舎の方で二百五十人位の大きな幼稚園をやっています。それは全部日本の皆様に支えてもらったおかげでできたもの、応援してもらつてつくつたものだから感謝しております。

私がスリランカで社会奉仕するときは、いつも黒田先生に支援してもらいました。黒田先生がスリランカにおいでになつてお目にかかるこ

とが出来て大変嬉しかったです。日本で学んだことをできるだけスリランカで教えていきたいと思ひます。今度みなさんも是非スリランカにいらしてください。



引田 第五回、平成元年にイギリスのオックスフォード大学の方に一年間育英生として奨学金をいただいて勉強させてい

ただきました。ちょうどその前の第四回に今、金沢大学の教授をしている森先生がおられて彼がロンドンにおりましたので、ロンドンとオックスフォードと続けて奨学金をいただいたという経緯があります。

私がいるときに先代の武志老師と奥様がロンドン、オックスフォードと来ていただいて激励

をいただきました。本当にありがとうございます。そのあと、非常に可愛がっていただきました。愛知学院には留学生も何人か来ておったのですが、スリランカとか、バングラディッシュとか、ベトナムとか、インドネシアとか、いろんなところからきていました。こうした世界各地からきている留学生に奨学金をいただきました。ありがとうございます。今それぞれが故郷に帰って活躍しておりますので非常によかったなと思っています。

やっぱりアジアのそういう人たちを見ていると、日本の仏教はもう少し広がりをもたなければいけないんじゃないかと思っています。檀家制度で今のような形でやっていくのがいいのか、それだとなかなか難しい時代になってきています。

昨年、用があつて台湾の佛光山に行つてまいりました。そこで佛光山の話だとか、それから

義災基金の先生たちと話していたら、やっぱり向こうは色んなことをやって、それをテレビでずっと放映しているんですね。こんなことをやっているんだということを常にアピールするところが台湾流ですかね。尼僧さんも非常に多く、その点も学ばなければいかんかなという気も最近いたしております。ありがとうございます。



ウィリアム・ダンカン
南カリフォルニア大学のウィリアム・ダンカンです。育英生としてご縁ができたのは十八年前

でしょうか。その時はハーバード大学のドクターコースで卒論を書くために駒澤大学の学長廣瀬良弘先生のところへ勉強させてもらっていました。学問より育英生として学んだことは、や

やはり黒田老師のエネルギー。そして、確信。それが一番残ったものです。採用された一年だけではなく、その後もよく老師から「ダンカン、明日までにこれを訳せ！」と言つてFAXが届くんですね。「今度スリランカに行くからこのダルマパーラの話英語に訳して明日までに」とか、こういうような注文がよくあつたんですけれど、関係というのがその一年だけではなくその後も続いたんです。

老師は自信を持つて、確信をもっていました。いつも老師は「ダンカン！」と大きな声で仰つて、なにかこう世界に出ていくような、大きい爆発みたいなものを常に感じさせて頂きました。人生なにかやるんだつたら大きくやるというような、自分の道を発見して歩んでそして大きく出るといふような、なにかすごい教えを彼のエネルギーしてもらつたなあということですね。その後大学教授になつたり、研究所を立ち

上げたりしましたが、今回三十回を迎えるにあつたつて、やはり立ち上げ、スタートアップというのは難しいもので、これも老師だからこそできたこと。そう思つて、じゃあ自分でしかできないものは何なのか、というものをいつも公案として問うことができたというのが育英生としての誇りだと思います。ありがとうございます。



サンヴィド・マルタ
イタリア、ヴェネチア
チア大学博士課程の
サンヴィド・マルタ
と申します。去年の
九月から早稲田大学の
大久保良俊先生のもとで
研究しております。
また今年の四月から駒澤
大学禅センターの研究
員として通っております。
今はまだ留学中なんです
ですけど、今年第三十回
の善光寺留学僧育英

会の育英生として採用して頂きました。そのお陰で早稲田大学に身を置いて順調に研究を進めております。この育英会のお陰で善光寺の皆様と交流できて人間として成長できたのではないかと思います。本当に感謝申し上げます。これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。



スターヘル圓成 ブラジル大観寺のスターヘル圓成と申します。私は十五年前育英生に採用頂きました。その育英金で

ブラジルに禅センターみたいなものをサンパウロから二時間離れたところでつくりました。その時から坐禅会とか摂心とか禅の話とかみんなに教えることができるようになりました。だんだん人も増えていって、みんな仏教とか禅に興

味を持つようになりました。以前は仏教のことはなにも知られていませんでした。しかし今ではセンターも狭くなって去年から新しい寺を作る計画をしています。典座寮とか禅堂とか新しく作ります。みんなで土壁を塗って一緒に作っています。

今、ブラジルの社会もすごい大変です。みんないろいろ混乱していますが、私もこれからはと頑張りたいと思います。善光寺の皆様のお陰でブラジルで十五年前に始めることが出来ました。そして桐ヶ谷寺の方丈様のおかげで続けることもできました。本当に皆様に感謝しています。どうもありがとうございます。

磯村 善光寺留学僧育英会三十回おめでとうございませう。私はインドの空港で先代方丈様にお会いしたことが育英会との出逢いでした。カルカッタ空港に友人と迎えに行っただのですが、飛



行機は到着しているのになかなか出て来られない。やっと出てきた方丈様を見てびっくり。お腹がお相撲さんのようにひ

どく膨らんでいるんです。開口一番「イヤー、金持ちになっちゃったよ!」とおどけておられ、胴巻きにインドの紙幣が分厚くグルグル巻きになっていました。貨幣価値の違いから両替の際に一気にお金持ちになられたというわけです。子供のように無邪気に機嫌よく笑っておられたお姿を懐かしく思い起こします。その後、第三回の育英生として採用して頂き研究を続けることが出来ました。帰国後も事ある毎に善光寺に伺いました。方丈様のお話を伺う度にその大胆な行動力に驚かされました。その折は、いつも倫子奥様がお側におられて献身的にサポートを

されていることが印象的でした。今日は久し振りに善光寺にお伺いして懐かしい皆様がたにお会いでき、予定を調整して駆けつけることが出来て本当に良かったです。先代様の志の高さと清々しさ、その強靱な魂を方丈様の教えとして私も受け継いでまいりたいと思っております。育英会の今後益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

司会 折角の機会ですから会場のみなさまよりご質問ご意見を受けつけます。なお、この後、懇親会もありますのでその際にお話されてもかまいませんが……。

それでは私の方から一言申し述べさせていただきます。

先ほど東老師が、黒田老師の育英会発願の影響を受けて世界禅センターを構想されたとお話をうかがいました。考えてみればこうしてこ

の善光寺において、インド、スリランカ、タイ、中国、今日は来ていないですけどモンゴルの方や韓国の方もいらっしやった。さらには欧米の一流の学者の先生達、また日本からも欧米に行かれています。考えてみたらここで世界仏教センターができるんですね。

かつて、私とヴィマラワンサさんと胡さんとモンゴルの嘉木楊さん、韓国の李煥秀さんとが善光寺育英会の辞令交付式で一緒になった時のことですが、こんな一幕がありました。

その時、私は皆さんに瞑想のときの印の結び方を一斉にやっていたのです。我々日本の禅僧は坐禅をするときに法界定印など瞑想の印を結びます。その場合、右手の手のひらが下、左の手のひらを上にします。これは中国や韓国も同じでした。しかしスリランカやモンゴルの僧の方々は左の手のひらを下にされたのです。その場でアジアの仏教文化の違いが一瞬のうち

にわかったのです。

また西欧の禅センターから来日された方、あるいは西欧の禅センターに参学した日本人僧も善光寺留学僧にはたくさんおられて、世界中の禅センターの様子や情報がこの善光寺ではわかるのです。日本にあまたのお寺がありますが、なかなかこういう機会をもてるお寺はありません。こんなことが出来るのはこの善光寺だからでしょう。それだけ世界中からここに多くの人材が集まり交流もなされてきたのです。一三〇人の力を結集すれば世界仏教センターも夢ではありません。そういう力を善光寺は持っているんですよ。世界的視野をもって育英会を創り上げた黒田武志老師の先見の明を改めて感じる次第です。

私も初めて黒田老師にお会いした時の強烈な印象は忘れられません。そもそも別の用件で善光寺に来たのですが、善光寺を出るときにはア

アメリカに行く事になっていました。「お前さんはアメリカに行きなさい」その一言です。日本でも一回も飛行機に乗ったことがない人が初めての飛行機でロサンゼルスに飛んだのですが、飛行機に乗っても、なぜ強く渡米を勧められたのかわかりませんでした。でも行ってよかったですよ。ロサンゼルスに行ったら「ああそうだったのか」と思いました。無理にでも人を動かす老師のエネルギ―ですね。私は黒田老師がいなかったらアメリカへ行っていないですからね。でもそれで変わったんです。大変大きな御恩を受けたつもりであります。そのことを一言加えさせて頂きます。それでは会場よりなにかございますか。

東郷総代 育英生の皆様ありがとうございます。私の方から三十四年前の育英会が発足する頃の話をしていただきます。そのとき先代大



圓武志和尚から、世界に留学僧を送るための会をつくりたいというお話をいただきましたが、ついてはお金がない、檀家

の方もお金がない。それなのにやりたい。しかし一人の力ではどうにもならない。そういうことでした。

しかし、それでも先代武志和尚はおっしゃいました。

「多くの力を結集しなければ一人の留学僧、一人の世界の将来を担う立派な人材はできない。私の理念は世の中の役に立つ人、そして役に立つ人を育てるといふ人を育てたい。そのためにお金がいる」と。

この強い先代の意志を受けまして、これまでそのお金を私たち檀信徒は三十何年間出し続け

てきたわけです。

「ちょうど先代が亡くなって、もう休めばいいなど、こう思っていたら、今度は新任職が「私は父を継承してこれからも留学僧を進めます」ということになりました。そして今日を迎えることができました。

これまで延べ百三十二名もの方を送り出して、今日ここでお集まりになったのが十四名です。一割の留学僧の方がお見えになりました。今皆さんのお姿を拝見して、ああ、よかった、こういう方々が世界で活躍され、またご自身も救われて、それぞれの道でいそしむことができているということがうかがえて、本当にうれしくほっといたしました。ああ、あのお金は無駄じゃなかったんだな、こういう風に使われて、皆さんがこういう風に羽ばたいていらっしやるのを感じて本当にうれしかったです。

私はあるとき先代に申し上げたんです。「理

事長、育英会はやめたらどうですか。だれも助かっていないし、留学僧の方も善光寺にみえないじゃないですか」と。

すると先代は言いました。

「ちょっと待て。これはな、他を救うにあらざっておのれ救われる」と、こう言われたんです。「留学僧となった方を救うのではなくて、これをやっている自分が救われるんだ」と。このお寺が救われるんだと。「同じようなことをやるお寺では意味がないんだ。特に他と違うとしたら何だといったらこの育英制度なんだ」と言われました。

こうして今日まで継承されて、おかげさまで、こんな小さなお寺で、三十年も続けて留学僧を送れたというのは、あるいは皆さん留学僧のご活躍のお陰なのかもしれません。

改めてこの育英会については今後も住職を応援し、留学資金をかき集めて、一人でも多く送

れるようにしたいな、そんなことを檀信徒として、今うかがって失礼ではございましたが、このように御礼申し上げさせていただきます。





☆留学僧体験談を刊行☆

横浜善光寺留学僧育英会育英生体験集

『法の華は人によりて開く』

この度、横浜善光寺留学僧育英会第三十回記念事業として、歴代の育英生各々が留学体験を執筆されたものをまとめました。皆様ご活躍され、時間の限られている中、二十五名の方々が体験談を綴って下さいました。



檀信徒の皆様方には既に記念交歓会後、お手

元にお送り致しておりますが、この体験集は仏教の専門的な論文ではなく、各人が留学中の貴重な体験や先代理事長黒田武志老師に対する思いをしたためており、この育英会の意義を見ることができます。

☆育英生からのおたより☆

冠省 過日は留学僧育英会の交歓会にお招き頂き誠に有難く存じます。おかげさまで貴重なひと時を過ごすことが出来ました。改めて感謝申し上げます。

それに致しましても三十年余りに亘って百三十人もの人間に無償の奨学金を出し続けることなどやはり尋常の覚悟で成し得ることではありません。しかも、不肖などは未だに善光寺様にお世話をかけている始末で、申し訳なく存じている次第です。ただ、「育英会」を支え続

けて下さっている無数の方々の思いは無駄にしてはいけない。自分なりに現在置かれている環境で微力を尽くそうという気持ちは常にもっておりま。報恩底をどのように不肖なりに体現していけるか、これが今後の課題と心得ています。

また、早速次年度の「募集要項」をお送り下さり有り難うございます。どうぞご自愛のほど。

六月吉日

島崎 義孝 九拝

残暑問候 先日ドイツよりトビアス氏が山寺まで来寺され、八月末までに京都で再会する予定です。書籍、有難く受領いたしました。トビアス氏にも渡したく、もう一部献本下さるようお願い申し上げます。まずは受領御礼とお願ひまで。

八月十七日

田中智誠 拝上

黒田博志老師

先日は大変お忙しい中、お時間を取って下さり、誠にありがとうございます。久しぶりにお会いできて大変嬉しかったです。

善光寺の住所を間違えてしまったため、約束の時間に遅れ、本当に申し訳ございませんでした。扇子をお送り致します。とてもつまらないものになりますが、これからはあつい季節になりますので、どうかお使いいただければ幸いです。ありがとうございます。

どうぞくれぐれもご自愛くださいますようにお祈り申し上げます。

五月二十八日の行事、無事に成功するよう、祈ってます。また、お会いできる日を楽しみにしてます。

九拝

アイダ・ママードウア

☆善光寺留学僧育英会

第三十回記念交歓会によせて☆

祈り申し上げます。

東京 牛込 真清浄寺 日光

【電報】

本日は、横浜善光寺留学僧育英会第三十回をお迎えられ、並びに記念出版をされましたことを重ねてお慶びお祝いを申し上げます。

黒田武志老師様の「元気にやっていますか」と、いつも励まして下さいましたお声が聞こえて参ります。当会、並びに善光寺様の益々の御隆盛を祈念申し上げます。 合掌

第六回海外留学僧

福井県 玉泉寺 沖田玉映 拝

善光寺留学僧育英会創立 三十周年を祝し、ますますの寺門繁栄を祈るとともに、育英会のみならずのご発展と、参会の各聖の法体健全をお

【お手紙】

拝復 『法の華は人によりて開く』を拝受、早速に読ませて頂きました。武志老師の創られた育英会も三十回、百三十名の留学僧を出されたとのこと、すばらしい仕事に順調にすすんでいること心より喜んでおります。各留学生の思い出話はそれぞれに面白く、ご本人達にとってもこうした文をまとめることは嬉しいことだっただしょう。私たち一般読者にとっても武志老師の御顔やお話しぶりをなつかしく思い出しています。

八月十八日

奈良康明

『法の華は人によりて開く』を拝受いたしました。育英会の活発な活動の諸相がよく記されており、いつもながらですが感銘を深くいたしました。先代武志老師の懸命に話されるお写真、とても懐かしく思います。武志老師の「人づくり」の悲願が確実に実現されていることを大変よろこばしく存じます。

博志老師には是非お師匠様を超えるような仏教者になられますよう強くねがっております。

熊谷総代様も矍鑠としておられ何よりのことと存じます。まずは御礼までに

八月十二日

合掌

佐々木宏幹

残暑御見舞い申し上げます

貴寺留学僧育英会第三十回おめでとうござります。また、記念誌『法の華は人によりて開く』ご惠贈賜りまして心から感謝いたしております

す。世界平和は心と心の絆により実現することです。一層の発展を祈念いたし御礼といたします。

合掌

宮本延雄 九拜

残暑厳しき折、お変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。育英生の体験集拝受いたしました。三十年の間に多くの育英生が育った姿に感慨を覚えます。善光寺様との御縁が育英生一人一人の人生を方向づけ、新たな彩りを加えていたことを考えますと、人と人との出会い、縁のもつ力の大きさを思わずにはいられません。益々の御活躍を念じ上げます。 不一

中外日報社 形山俊彦

前略 過日育英生体験集を送って頂き博志様の心情に大変嬉しく拝読させて頂きました。

今でも私の印象に残っている方は秋田県の方で国安大智さんです。私の想像ではニューヨーク禅センターへの一回生ではと思います。一度米国へのビザを拒否されたことで方丈様からなんとかしてほしいと依頼されて、当時たいへん仲良くしていた領事を再度説得して発給して頂いた事を今でも思い出されます。

その後大智さんのお父上様から丁寧なるお礼のお手紙を頂いた事も思い出されます。大智さん、お父様の智哲様、ご壮健でご活躍されていることと察しております。又、三、四名の方のビザの取得にもお手伝いをした記憶があります。その中のお一人、今回手記を拝見致しました静岡県にお住まいの河内様も記憶にあります。今考えたいへん微力ながらお役に立てた事、嬉しく思っております。

それにしてもお父上の方丈様は偉大な方だと感銘しております。

末筆ながら益々のご発展心よりお祈り致します。乱筆乱文ご寛容の程を。

鈴木良一

謹啓 育英生体験集『法の華は人によりて開く』を賜りまして大変有り難うございました。先代理事長および皆様からの御恩を忘れず精進して参りたいと存じます。今後何卒よろしくお願い申し上げます。

早川祥賢 九拜

前略 ごめん下さいませ。『法の華は人によりて開く』を送って下さいましてほんとうにありがとうございます。黒田武志前理事長様の情

熱が結晶となり実を結び、あとを継がれた博志様も立派です。『法燈は海を越えて』とともに、大切に読ませていただきます。横浜善光寺留学僧育英会の益々の発展をお祈り申し上げます。

かしこ

八月吉日

浅香 恵

前略 『法の華は人によりて開く』ありがとうございます

うございました。秋彼岸法会は、どうしても予定がとれず参加出来ないこと残念です。水庭師の法話も楽しみにしておりますが、又の時に

.....

ご詠歌の会への参加何とか出来たらと思っております。

高橋百合子

☆育英生からの寄贈本☆

・IPPEN: The Japanese Buddhist "Sage

Who Abandoned All" 早田(磯村)啓子

・『原発 瞬楽永苦』 島崎義孝 ノンブル社

・『身心が美しくなる禅の作法 一日一禅』

(樋口) 星覚 主婦の友社

・『日蓮大聖人 法華経の真実 吉田日光共著

白陽社



〈連載〉

『普勸坐禅儀』

に学ぶ

その十一

駒沢女子大学教授 安藤 嘉 則

〈本文 書き下ろし文〉

鼻息びそく微かに通じ、身相みさうすでに調えて欠気かんき一息し、左右ようしん揺振よぶして兀兀ごつごつとして坐定ざじやうして、箇この不思量しりよう底ていを思量しゆりやうせよ。不思量底しゆりやうてい如何いかが思量しゆりやうせん。非思量ひしゆりやう。此れ乃すなわち坐禅ざぜんの要術やうじゆつなり。

〈現代語訳〉

坐禅のときは呼吸は鼻で静かに出入をします。坐禅の姿勢をとるとのえると、欠気一息すなわ

ち大きく息をはき出してから息を吸い込みます。そして体を左右に揺らして坐を安定させから、微動びどうだにしない不動の姿勢となり、不思量底しゆりやうてい（思い量ることのないところ）を思量しゆりやうしなさい。しかし不思量をどのように思量するのでしようか。それは非思量（とらわれなき思量）です。これは坐禅の要となる術です。

前回もこの同じ一文を解説いたしました

主に呼吸法やマインドフルネスなどの最近のストレス対策の瞑想法などを紹介させていたいただきました。今回改めてこの一文を説明させていただきますが、まず始めに坐禅の説明でよくいわれる調身・調息・調心ということについて少し述べさせていただきます。

この調身・調息・調心とは、坐禅をするとき、まず体を調べ、息を調べ、心を調べていくことを順に確認していくもので、坐禅の方法を説明するガイドブック・マニュアルには大抵この流れが示されています。

しかしここで改めて確認しておきたいことは、道元禅師の『普勸坐禅儀』や『正法眼蔵』などの著作において、この調身・調息・調心という三段階の方法は具体的に示されていません。現在では坐禅に入る手順としては、まず調身として、足を組み、背筋を伸ばして姿勢を調べ、体を左右揺振させ、視線を前方に落として半眼と

します。次に調息に入り、欠気一息（深呼吸）を始めます。こうして息を整えてから調心へと入っていきます。しかし、本稿冒頭に掲げた『普勸坐禅儀』の一文では、「欠気一息（深呼吸）し、左右揺振（左右に体を振り子のように揺らすこと）」とあり、調身から調息へとという流れに則っていません。

この調身・調息・調心は、坐禅に入っていくために具体的で大変有効な説明であると思えます。しかし、誤解してならないのは、これが坐禅のステージ（段階）を示すものではないということです。もし坐禅を調身の段階から調息の段階へ、調息の段階から調心の段階へという過程とといったようにとらえるならば、体や息を調えることが心を調えることのお膳立てとなってしまうのです。しかし坐禅は身体も呼吸も心も一体なのであり、あくまで調身・調息・調心は坐禅に入る最初の段階での説明であるといえま

よう。

実際に坐禪を組んでみますと、坐り方一つとっても、人によってさまざまです。坐法は結跏趺坐であればよいのですが、坐禪会などに通われて慣れてる人はともかく、大学で学生たちに坐禪を指導しておりますと、この結跏趺坐ができるのは全体の半分どころか四人に一人もできません。結跏趺坐どころか比較的楽な半跏趺坐もできない学生もいますし、場合によってはイス坐禪で対応することもあります。結跏趺坐や半跏趺坐ができることにこしたことはありませんが、無理してはいけません。それぞれの坐法で、できるだけ姿勢や調え、目のまぶたを少し落として半眼とし、肚を中心にした丹田呼吸を行います。坐禪のときは、まずこの呼吸に専念することが大切です。

呼吸というのは、いうまでもなく人間にとつて酸素を採り入れる身体活動なのですが、ここ

で改めて漢字の「息」についてみると、この漢字は「自」と「心」という字から成り立っています。このことは「息」が単なる空気の出し入れという身体面ばかりでなく、「自らの心」と結びついていることを推測させます。例えば、息をのんだり、息が詰まったり、息苦しかったりするのは、単なる身体的現象ではなく、心のあり方も表しています。このように息と心は関連しているのであって、調息はそのまま調心へとつながることが示唆されます。

ただし「息」という漢字を構成する「自」と「心」は、それぞれ「鼻」と「心臓」の象形文字とされますので、「息」を「自らの心」に分解して理解するのは、いわゆる通俗的語源解釈に過ぎません。しかし坐禪においては調息から調心へ入って行くときの説明として有効ではないかと私は思っております。

さて、冒頭の『普勸坐禪儀』の一文で「兀兀

として坐定して、箇の不思議底を思量せよ。不思議底、如何が思量せん。非思量。これ乃ち坐禅の要術なり。」という一文について説明いたします。

ここは道元禅師が「坐禅の要術」とされているように、坐禅のポイントとなるところですが、実はこれは中国唐代に活躍し、中国曹洞宗の成立に大きな影響を与えた薬山惟儼禅師（七四五～八二八）の言葉に由来しています。

薬山弘道大師、坐する次、有僧問う、
「兀兀地に什麼をか思量す」

師（薬山）云、「箇の不思議底を思量す」

僧云、「不思議底、如何が思量せん」

師云、「非思量」

元来、この『普勸坐禅儀』は宋の長蘆宗頤によつて編集された『禅苑清規』に収録されている「坐禅儀」を下敷きにして書かれているのですが、ここでは道元禅師はこの薬山禅師の問答

を引用して坐禅における心の有り様を示しているのです。

そこでこの問答の内容を説明します。あるとき薬山惟儼が坐禅をしていると、ある僧が「兀兀地に什麼をか思量す」と質問します。「兀兀地」とは山が微動だにしないように不動の様を意味します。また「思量」はあれこれ思いめぐらすことであり、要するに考えることです。ですから「どつしりとお坐りになっていますが、なにを考えておられるのですか」と尋ねたのです。

すると薬山は「箇の不思議底を思量す」と答えます。この「不思議底」の「底」とは、動詞や形容詞な語を名詞化させる接尾語ですので、「不思議底」は「考えないこと」となります。そして、この「考えないこと（不思議底）」を目的語として「思量する」という動詞が続きますので、そのまま現代語訳にするならば、この薬山の答えは「考えないことを考える」という

意味になります。しかし、この、一見矛盾する
ような、わかりにくい答えに、僧は「考えない
ことをどのように考えるか」（不思量底、如何
が思量せん」と問います。そしてその答えが「非
思量」という一言でした。「不思量」に続いて「非
思量」という言葉が出て来ますが、「不思量」
と「非思量」はどこが異なるのでしょうか、非
常に難しい問答です。『普勸坐禅儀』では、こ
の薬山の「非思量」の答えを坐禅の要術である
としています。

ところで、この「不思量底を思量す」という
文は、「AをBする」という目的語＋動詞とい
う構造になっています。通常は本（A）を読む
（B）といったように、Aの目的語はBの動作
の対象となりますが、この文では「不思量底」
という目的語が「思量」という動詞に由来して
いるので、意味がつかめなくなるのです。たと
えば「本を読む」という文は明確ですが、「読

まないことを読む」ではわかりません。

鏡島元隆先生はこの「不思量底を思量す」な
る一文を「思慮分別を超えたところを思量する
のである」（『道元禅師語録』講談社学術文庫）
と訳されています。すなわちこの「不思量底」
の「不」を、単なる否定の意味ではなくて、「超
えた」と捉え、あれこれ思慮することにとらわ
れずに思慮することと解釈されています。

そもそも人は生きている限り、心の働き、意
識活動をストップさせることはできません。考
えまいとしても、自然と思いは湧いてきます。
坐禅において大切なことはこうした心中に自ず
から湧いてくる思いに対して、それぞれ相手に
せず放っておくことです。そうしている間に自
然と消えてしまいます。あたかも大空に浮かぶ
雲のように、気がつくくと自然と消えています。
しかし私たちの心に浮かぶ雲は、人によっては
いつまでも心にくっついて離れません。たとえ

ば或る人は三年前のつらい思い出がトラウマとして今の私の心にどっかり座り込んでいたりします。不思議底の思量とは、そうした私たちの様々な思い・分別・感情などを手放していく、とらわれない心の有り様であるといえましょう。

この「不思議底を思量す」をさらに問われての答えが「非思量」ですが、この「非思量」について、古来さまざまな説明がなされてきました。原田弘道先生は「非思量について」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第二六号」という論文において「非思量」について次のように述べておられます。

それ（＝非思量）は具体的には、すべての観念・感情・意欲等の意識活動を押さえたり、求めたりすることなく、生滅去来に任せきることである。これらは本来無自性であるから生滅に任せれば自然に消滅するのである。いわゆる煩惱といへども意識作用の一種にすぎないし、菩

提も同じく意識作用以外のものではない。ただ菩提とは意識活動は依然として存しながら執着我執が脱落したものをいうのである。

このように原田先生は、この非思量について、「菩提」という言葉を介しつつ、さまざまな意識活動における執着我執の脱落としてとらえておられます。これが「非思量」の直接的説明であるといえましょう。

非思量の意味は原田先生のご説明の通りですが、鏡島先生は前著において、この「非思量」を「それは思量をなくすことではなくて、思量の一つ一つに思量を超えた智のはたらきを現していくことである」（『道元禪師語録』講談社学術文庫）と訳しておられます。この解釈は、意識活動における執着我執の脱落というところから、さらに思慮を超えた智（菩提）のはたらきの現れであることが明示されています。

禅門でよく引用される言葉の中に、『金剛経』

の「おうむしよじゅうにしようこしん 応無所住而生其心」という言葉があります。これは「まさに住することなくして、その心を生ず」と訓読しますが、ここで「住する」とは、あれこれ執着しとらわれることを意味します。「まさに住することなくして(応無所住)」というのは、心になにも執着することがない、いわば非思量ということであり、「その心を生ず(生其心)」というのは、そのとらわれのない本来の心を発現していくということでしょう。

たとえば車を運転する場合、ブレーキを踏んだりウィンカーを出す一つ一つの動作を確認しながら運転しているわけではありません。赤信号になった↓停止させなければいけない↓右の足をつかってブレーキを踏もう。そんなこと意識して運転したら事故になってしまいます。私たちは自らの心の運転において自然に「住することなくして」運転しているように、私たちの心の運転もとらわれのない心をもって日々展開

していくことが大切なのです。「非思量」の「非」という接頭語は元来否定的な意味合いですが、鏡島先生の智の発現としての「非思量」の解釈はこうした積極的な智の展開としてとらえられています。

ところで最後にこの不思議あるいは非思量について大変興味深い解釈を紹介します。

それは内山興正老師の『普勸坐禅儀を読む 宗教としての道元禅』(大法輪閣)にある解釈です。

そうして思いの手放しである坐禅の姿勢(不思議底)を、ただ骨組みと筋肉をもって生き生きとネラッテいる(思量する)ことが、正しい坐禅というものである。思いの手放しの姿勢を、骨組と筋肉でネラウトはどういうことか——それは「人間の思いではない、思い以上の生命の実物をすることだ(非思量)」である。

ここで「思量」の「骨組みと筋肉をもって生き生きとネラッテいる」とする内山老師の解釈に驚かされます。思量という語は、あくまで心の働き、意識活動ですが、それをあえて「骨組みと筋肉をもって」という説明を加えておられます。坐禅は身体も呼吸も心も一体であり、骨組みと筋肉をもってネラウというのは、全心身でもって坐に打ち込むことに他ありません。この内山老師の言葉は「思量」や「不思量」を言葉の概念として机上で論じたような解釈ではなくて、坐禅堂の単（坐禅する畳）から実況放送で発せられた言葉のように思います。

さらに「非思量」も「人間の思いではない、思い以上の生命の実物をする」と解釈するのですが、これも「生命の実物をする」という独特の説明となっています。この解釈も単に思量あるいは意識作用という枠を超えた全人格的な意味付けがなされており、日々の坐禅実践か

ら迫り来る老師の迫力ある肉声のような思いがいたします。

以上、不思量底の思量、あるいは非思量という言葉を先学の言葉を紹介しつつ解説いたしました。これまでの諸先学の方々の説明は大変参考になりますが、ただ非思量という言葉の理解以上に大切なことは、身も心も、そして呼吸も一つにして今の坐禅をどう坐るかということに他ありません。



曹洞宗のご詠歌は、梅花流詠讃歌といい、お釈迦様や道元禅師・瑩山禅師の

ご一生や曹洞宗の教えが歌詞となつていきます。お唱えをしながら楽しく仏教に触れる
ことができます。善光寺では今年より毎月一回、御詠歌教室を開催しています。

講師は、曹洞宗梅花流特派師範 栃木県高徳寺副住職渡邊清徳師です。

春彼岸法会には御詠歌のお話を頂き、一緒にお唱え致しました。

『彼岸へのお唱え』

梅花流特派師範 渡 邊 清 徳

(高徳寺副住職)

おはようございます。

栃木県の北の方にある鬼怒川温泉の手前に日光市高徳という場所がございます。この高徳の地名を頂いた「高徳寺」というお寺の副住職を

仰せつかっております渡邊清徳と申します。よろしくお願い致します。善光寺様とは法類といまして、血のつながりはないのですが、お坊さん同士の親戚、「ダルマ・ブラザーズ」にな



ります。またこちらの博志住職とは永平寺で一緒に修行をした仲間でもございます。そんなご縁もあり、今日はこの時間をつとめさせて頂きます。

さて皆様、「御和讃」ごわさん「御詠歌」ごえいかはご存知ですか。かつて、四国や西国、坂東などの巡礼（お遍路とも言います）をする時に、各お寺に歌を奉納していく風習がございました。その時にお唱えする歌を「御和讃」とか「御詠歌」といいます。曹洞宗の流派名は「梅花流詠讃歌」ばいかりゅうえいさんかとあります。「梅の花」可愛らしいですね。リーフレットにも梅の花がたくさん描いてあるのは梅花流をモチーフにしているからです。この善光寺様でも御詠歌をお檀家の方に広めたいと、数年前から博志住職からそのような雰囲気のあるチームを受け続けてきまして、今年から月に一回御詠歌教室を担当させていただくことにな

りました。

これまで三回ほどさせていただきましたが、教室では初めての方がほとんどであるにも関わらず、皆様大きな声で御詠歌を唱えて頂いていきます。そんなに難しいものではないです。恥ずかしいから、一緒に唱えたいと思います。

みなさんは今朝、ごはんを食べて来られましたか？お腹いっぱいですね。それでは力も入りますね。いきなりですが発声練習をしましょう。日本の音階は「ファ」と「シ」をあまり使いません。ですので「ドレミソラドレミ、ミレドラソミレド」となります。最初は低めの音からいきます。やってみましょう。

「ドレミソラドレミ、ミレドラソミレド」
おっきい声を出すとストレス発散になりますので大きい声で行きますよ。

「ドレミソラドレミ、ミレドラソミレド」

この音の高さは、大体女性の平均くらいですね。それではもう一つキーを上げていきましょう。

「ドレミソラドレミ、ミレドラソミレド」
もう一つ上げちゃいましょう。

「ドレミソラドレミ、ミレドラソミレド」
上のミ音がキツイなという方はいますか？ いらっしゃらないようですね。皆さん声が若々しいですね。

それではもう一度。

「ドレミソラドレミ、ミレドラソミレド」

ありがとうございます。皆さん大きな声を出してくださいるので本当にありがたいです。

さて今日は、お彼岸の法要でございます。お彼岸は春分の日、秋分の日を真ん中にした七日間のことを指します。春分の日、秋分の日は、

昼と夜の時間がちょうど一緒になり、昔から節目の日として大切にされてきました。こういう日にお寺さんに来ると、功德が普通の日のポイント五倍増しになるそうです。だからお参りした方がいいですよ（笑）。

ちなみに、彼岸の意味を皆さまご存知ですか。実は文化的意味合いと仏教的意味合いがあいまって現在のお彼岸という行事が執り行われているのです。

まず文化的意味合いですが、お彼岸はインドや中国にはない、日本だけの文化です。「国民の多くの人が仏教を学んで心穏やかになつて欲しい」という思いで、「春分の日、秋分の日」という節目に、お寺さんにお参りに行き、仏教を学ぶと心が穏やかになりますよ。みんなお参りに行きましょう」と仏教を奨励したのがきっかけです。

次に仏教的な意味合いです。「彼岸」とは「彼

(か)の岸」と書きますね。向こう岸という意味です。また、この私たちがいる世界は、この彼岸に対して此の岸と書いて「此岸(しがん)」といえます。この世の中は、自分の思い通りに行かないこともたくさんあるし、思いがけないことや、苦しいこともたくさんあります。そのような思いに振り回され、迷いの中にあるのが「此岸」。それに対して、悟りの世界、色々なことに惑わされず心穏やかな境地を「彼岸」と言います。仏教的に「彼岸」というのは特別なところに行くことではなく、この「此岸」にいなから、「彼岸」の境地に至るということです。

彼岸の境地というのは、細かいことに心が揺り動かされたりしません。「いつ死ぬのか」とか、「病気になるのではないか」など、みなさんそれぞれ不安に思うかもしれませんが、そのような思いにならずに心穏やかに暮らせるのが彼岸の境地です。

しかし、自分の力で「そこに行きたい」といってもなかなか行けない。では、どのようにしたら良いか。それは本日読むお経「修証義」の第四章「発願利生」に書いてあります。この章の冒頭に「菩提心を発すというは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願し営むなり」とあります。

「己れ未だ度らざる前に」とは、自分が彼岸に到る前に、仏さまの智慧を使って一切衆生を渡そうということ。「度さんと発願し営むなり」ですから、「自分で思いを起こしてほとけさまの智慧を使って行動に移す。そうすると自然と自分も彼岸の境地に導かれますよ」ということです。

永平寺の修行を終える時は、山門で最後のお拜をして自らの寺に戻るのが通例ですが、私は旅支度そのままの格好で永平寺を出発し、歩い

て琵琶湖の北側を通り、京都に向かって南下して、大阪まで行き、そこから四国に渡りました。私が目指したのは四国の八十八ヶ所です。四国中を三十三日ほどお遍路しました。だいたい一日四十キロ程歩きます。車でおよそ一時間走る距離が、人間が一日歩く距離だと思っただければ良いと思います。四国では歩いていたら所々に長いトンネルがあります。車に乗っているとあまり気付かないと思いますが、トンネルの中は、まずとても暗い、車の排気ガスがひどい、そして実は騒音がものすごいのです。顔は排気ガスですすけますし、軽トラックが通ってもまるでジェット機のような音でゴーと凄まじい音がするのです。お遍路中、私はこのトンネルがとても苦手でした。

愛媛県の宇和島市に、松尾トンネルというトンネルがあります。地図で見ると二キロちょっとありました。そうなると時速四キロで歩いた

としても三十分位かかる。三十分間排気ガスまみれになるわけですから、なるべくうまくやり過ぎたいですね。もうその頃には要領を得ていましたので、たも時からマスクを出し、なるべく排気ガスが入らないようにマスクの横をピタッと顔に押し当てて、中に入る準備をしていました。

さあトンネルに入ろうと構えた瞬間、後ろから黒いダンプロックがビューっときて、僕の前には止まったのです。トンネルの入口の路側帯に自動販売機がありました。ダンプの運転手さんが降りてきて自動販売機で何かを買おうとしていました。私とその後ろを通り過ぎようとしたら、「おい、なんか飲むか」と声をかけてこられました。あまりにも唐突でしたので、つい「結構です」と断ってしまったのですが、四国ではお布施のことを「お接待」というふうに言っています、「おせっかい」じゃないですよ(笑)。

「お接待」。お遍路をしている方に施してくれる習慣のことです。

永平寺を出発する前、そのお接待のことを聞いた時、僕は出家の立場だから、施しは必ず受けよう、断らないようにしよう決めていました。しかし、いざ出発すると、これから険しい山を登ろうとする時に、名物の伊予柑をたくさん袋に入れて頂いたりすることが多々あったのです。当然、心に決めたことです。いららないなんて言えないじゃないですか。ズッシリと重い袋をぶら下げて必死に山を登った記憶もあります。

そんな経験も重ねており、つい思わず断ってしまったのですが、すぐに思い直しました。「頂戴いたします」というと、「じゃあなんか好きなのを押さない」と言われるので缶コーヒーを押しました。すると、「もう一本飲め」と言われなかったので、「はい」と、もう一度ボタン



を押しました。運転手さんも自分の飲み物を買
いおわると、「乗って行くか」といわれたのです。
実はお遍路さんを車に乗せることもお接待なの
です。同行二人と行って、お遍路をしているの
は一人ではなくてお大師様（弘法大師）も一緒
に歩いている。だからお遍路さんを車に乗せる
ことはお大師様を乗せていることなのだ。とい
う話は聞いたことがあります。

「わかりました、じゃあお願いします」と言
って、そのトラックに乗せて頂きました。私は、
「乗って行くか」と言われた時点で、実はこの
人は飲み物を買いたくて止まったのではなく、
私を乗せたくて止まったんだなっていうのに気
付いたので、乗せて頂きトンネルの中を走って
いる間に聞いてみました。「どうして私を乗せ
てくれたのですか」と。すると運転手さんは「以
前にも和尚さんを乗せたことがあるんだ。そし
て和尚さんを車から下ろした後、なんだかすこ

く清々しい気持ちでそのあと運転することが出来たんだよ。それから、和尚さんを見つけたら必ず乗せてやると心に決めていたんだ。」と言われました。

やはり私は最初から狙われていたのですね。

(笑) でもこれが大事です。「己れ未だ度らざる前に」、つまり自分が先に渡りたいと思っても彼岸には渡れない。運転手さんは僕に親切にしてくれました。苦しいトンネルを、乗せていくよといつて乗せてくれた。そのことによって運転手さんも自分自身が良いことをして清々しい気持ちになった。彼岸の境地に達して運転することができた。

見返りを求めず、人がこういうことしたら喜んでくれるだろうということをしていく。そういう風に相手の立場に立って行動し、過ごすところが彼岸のところです。

お手元のリーフレットをご覧ください。今日

はこの御詠歌をお唱えします。お見えになっている方の中には、ご先祖様がお迎えになる方もいらっしゃると思います。亡き人の供養のために、またご先祖様のために心を込めてお唱えをする。自分の為でなく亡き人の為。けれど、いつの間にか自分の心が癒やされている、そんな不思議なものが御詠歌でございます。

このあとの法要に皆さんでお唱えをしていただくための練習がこの時間です。「まごころに生きる」と書いてあるリーフレットを出してください。中は五線譜になっております。ご一緒に口ずさんでください。

①そよ吹く風に小鳥啼なき

川の流れもささやくよ

季節の花はうつりゆき

愛しい人は今いずこ

ほほえみひとつ涙ひとつ

出逢いも別れも抱きしめて
生きてゐる今を 愛して行こう

② 広がる海ははてしなく

全ての命はぐくむよ
人の心もおおらかに
互いを敬い信じ合おう
ほほえみひとつ涙ひとつ

出逢いも別れも抱きしめて
生きてる今を 愛して行こう

③ 幼い頃にいだかれた

温もり今も忘れない

この世でうけた幸せを

そつとあなたにささげましょう
ほほえみひとつ涙ひとつ

出逢いも別れも抱きしめて
生きてる今を 愛して行こう

簡単でしょ。耳につきやすい歌ですね。昔のお念仏みたいなイメージはないですよ。この曲は南こうせつさんが作った歌なのです。南こうせつさんは大分県の曹洞宗寺院の次男坊です。実はお寺の生まれなのです。ご縁がありまして十五年ほど前にこの曲をつくって頂きました。歌詞をあらためて読んでみましょう。

一番の歌詞です。

『そよ吹く風に小鳥啼き 川の流れもささやくよ 季節の花はうつりゆき』、心地よい風が吹き、小鳥がさえずり、雪解けの水が川を流れて、そうしていくうちにいろんな花が咲いてきます。これは本当に自然の姿です。

『愛しい人は今いずこ』、ところが皆様の大切な人、愛する人たちは、いつの間にか季節の流れと同じように私達の前からいなくなってしまう。今どこに行っているのか、というこ

とです。これは普通のことです。その時はごく悲しいそういう思いがある。でもそれも「無常」といって「常が無い」ことです。お釈迦様のみ教えです。だから、普通のことのように過ぎていく「無常」の世の中を、

『ほほえみひとつ涙ひとつ 出逢いも別れも抱きしめて 生きてる今を 愛して行こう』

「ほほえみひとつ」楽しいこともあるし、「涙ひとつ」ぐっとこらえて我慢しなくてはならないこともある。出合いもあれば悲しい別れもある。その一つひとつから逃れることなく、目をそむけず、真正面から、生きている今の自分自身も愛して生きていこうよ。ということですよ。

二 一番の歌詞。

『広がる海ははてしなく 全ての命はぐくむよ』、「海の水を辞せざるは同事なり」という教えがあります。海はあんなに広くて大きいのに、

あの川の水はよくて、この川の水はだめですとは言わない。汚れている水だろうが、綺麗な水だろうが、どんな川の水でも全てを受け入れるわけです。だから海は大きくて広いのだ。

『人の心もおおらかに 互いを敬い信じ合おう』、人間もこの人は好きだ、嫌いだ、そういう思いを持つてはいけません。全ての人間をそういう思いをもって過ごさなければいけません。また相手の立場に立つて思いを巡らすこと。苦しんでいる人にはその人の目線で見えてあげること。これは「同事」というみ教えです。今日読むお経にも「同事」という教えが入っております。自分が経験したことならそういう立場に立つことはできませんが、自分が経験してないことは中々分かりません。お釈迦様はいつも相手の立場に立つのに、「慈悲の眼をもって相手に接しなさい。」といいました。

慈悲の「慈」の字は、いつくしむと読みます。

相手を思いやること、これは観音様の誓願です。観音様は相手が望むように、姿かたちを変えて相手に喜びを与える。慈しみの心を持って、相手の喜びの気持ちに寄り添っていく。目標に向かって努力をする人にサポートをするのも観音様と同じ思いです。

次に「悲しい」という字ですが「あわれみ」と読みます。こちらはお地藏様の誓願です。お地藏様の誓願というのは、「代受苦（だいじゅく）」といって衆生の悲しみ苦しみを代わって受けることです。みなさん、今日はお寺のはからいで椅子が出ています。みんな正座したり床に座ったりするのは大変ですよ。住職さんの計らいで、皆様の気持ちになって考えた時に、足が痛い方には椅子のほうがいいんじゃないかと思って用意されたことでしょうか。慈悲の眼で相手に接する。これが同事の教えです。国の違いや人種の違い、好き嫌いで分け隔てるのでは

なく、どんな人にも慈しみの思い、哀れみの思いをもつて接する。相手の立場になってあげる。そういう思いを持って相手に接することを「同事」と言います。

三番の歌詞です。

『幼い頃にいだかれた 温もり今も忘れない
この世でうけた幸せを そつとあなたにささげましょう』、これは「利行」という教えであります。自分の体を使って相手に施すことです。また自分よりも他人を優先させることです。例えば自分は他人よりも元気だとします。電車で座席に座っている。足が痛そうなお年寄りが立っていたら代わってあげるということです。また、例えば下駄箱に入れるとき最初にきて一番入れやすいところに入れますか？一番入れにくいところに入れますか？ 最初に来た人は一番入れにくいところから入れてください。なぜな



らあとから来た人が息を切らして、急いで来たときに一番入れにくいところに入れなくてはいけなくなってしまうからです。

最後に入れやすい所が残っていれば楽じゃないですか。自分は時間にも余裕があるし入れにくいところから入れる。でも、じゃあ早く来た人はいつも、自分は貧乏くじ引いているのかというところじゃない。今度は自分がギリギリに来たときにいいところが空いている。そういうものですね。これが利行です。いつも相手を優先させているといつの間にか自分も優先される立場になりますよ。

この「まごころに生きる」にはこのように「無常」「同事」「利行」の教えが含まれています。曲想は明るく大らかに一緒にお唱えしましょう。

①そよ吹く風に小鳥啼き 川の流れもささやくよ 季節の花はうつりゆき 愛しい人は今いずこ ほほえみひとつ涙ひとつ 出逢いも別れも抱きしめて 生きてる今を 愛して行こう

②広がる海ははてしなく 全ての命はぐくむよ 人の心もおおらかに 互いを敬い信じ合おう ほほえみひとつ涙ひとつ 出逢いも別れも抱きしめて 生きてる今を 愛して行こう

③幼い頃にいだかれた 温もり今も忘れない この世でうけた幸せを そつとあなたにささげ ましょう ほほえみひとつ涙ひとつ 出逢いも別れも抱きしめて 生きてる今を 愛して行こう

一曲目はこれで終わりです。この曲は法要の中でお経が終わったあとに唱えます。タイムイングは、私が唱えはじめますので続いてお唱え下さい。

つづいて二曲目、『三宝御和讃』です。こちらはオーソドックスな御和讃です。

①心の闇を照らします

いとも尊きみ仏の
誓願を冀うものはみな
南無帰依仏と唱えよや

②憂き世の波を乗り越えて

浄きめぐみにゆく法の
船に棹さすものはみな
南無帰依法と唱えよや

③悟りの岸にわたるべき

道を伝えしもろもの
聖者に頼るものはみな
南無帰依僧と唱えよや

三宝御和讃の「三宝」、これは仏教徒の三つ

の宝、仏・法・僧を指しています。

①心の闇を 照らします いたも尊き み仏
の 誓願を冀う ものはみな 南無帰依仏と
唱えよや

「南無帰依仏」の帰依というのは、抛り所に
致しますという意味です。南無というのも「ナ
ーモ」というインドの言葉で、意味は帰依とい
う意味です。ですので、南無帰依は「帰依帰依」
という意味です。

例えば南無阿弥陀仏は、「阿弥陀さんに帰依
します」ということであり、南無妙法蓮華経は
「妙法蓮華経に帰依します」ということです。
こちらは南無帰依仏ですから「お釈迦様、み仏
様に帰依します。」ということですよ。

しかし、皆様、「帰依します」といつてもピ
ンとこないですよ。今私はお袈裟をつけてお
りますけど、これは「南無帰依仏」の態度の現

れなのです。右肩を出すというのは「偏袒右
肩けん」といって「お釈迦様の教えが聞きたいです」
という意味です。だからお坊さんはみんな右肩
を出していますよね。私たちは、お釈迦様の教
えをたくさん聞いて、「お釈迦様のようになり
たい」という願いを態度で現しているのです。

お釈迦様は誰にも平等ですし、心も常に穏や
かです。煩惱にかき乱されることのない心なの
です。私達も毎日を穏やかな気持ちで過ごした
いですよね。カーツとなったり、感情的になっ
たりしない、お釈迦様のようになりたいとい
うのが南無帰依仏なのです。善光寺様に来ていろ
いろな心の安らぎを得ているかと思いますが、
それを一瞬だけするのではなく、続けていくと、
自分自身もお釈迦様のようになって、多くの人
に接することができる。仏教徒の最終目標はお
釈迦様になるということです。

②憂き世の波を乗り越えて 浄きめぐみにゆく法の 船に棹さすものはみな 南無帰依法と唱えよや

「南無帰依法」の「法」というのはお釈迦様の智慧の教えのことです。ですので「お釈迦様の教えに帰依いたします」という意味です。お釈迦様になるためにはお釈迦様の仰っていることよく勉強して、理解をして、その教えの実践をしなければなりません。

お遍路の途中では、学校帰りの子供たちからよく声をかけられました。みんなに「ようお参り」と言われます。最初はびっくりしましたが「ようお参り」とは「よくお参りくださいました。気をつけて行って下さいね」という意味です。優しい言葉ですよ。急斜面を登るときなど、苦しい時に「ようお参り」という言葉を思い出して、何度「ああ頑張らなきゃ」という気持ちにさせていただいたか分かりません。優しい言

葉をかけるということが、お互いの「法」の実践になつていのです。お釈迦様の教えを実践することで、少しずつお釈迦様に近づいていく。「この教えを大切にしなければいけない」だから「南無帰依法」と唱えるのです。

「船に棹さすものはみな」とあります。この世の中、いろんなことがある世の中を舵がない船で渡るのか、それともお釈迦様の智慧の教えという舵をもってこの荒波をいくのかと言われたら、舵があつたほうがいいですよ。苦しみを乗り越えて向こうの岸に行ける方がいいですよ。それがお釈迦様の智慧の教え「法」です。

③悟りの岸にわたるべき 道を伝えしもろもろの 聖者に頼るものはみな 南無帰依僧と唱えよや

「南無帰依僧」の「僧」の字はお坊さんとい

う意味です。でも、これはお坊さんのことだけではありません。今、善光寺にきているメンバー全ての人のことです。道を求めて歩む仲間のことなのです。

永平寺には約二百人の修行僧がいます。もし一人で修行していて朝を迎えたら、今日は眠いからサボっちゃおうかなと思うかもしれない。でも二百人もいてみんなが起きていますから、自分だけサボるわけには行かないのです。みんながいるからこそ励める。自分が挫けそうになっても、隣の友達が、「何やってんだよ。一緒にお釈迦様を目指すんじゃないか」と言ってくるから頑張れるわけですね。そのようにして、自分が大変な時には他の人から助けられ、自分に余裕がある時は自分が支えてあげることが「南無帰依僧」ということであります。

この「三宝」というのは目標である「お釈迦

様」「お釈迦様に近づくための智慧」そして「一緒に励む仲間」のことを言います。仏教徒の大切な三つの宝です。

この三つを称える曲が三宝御和讃であります。これは法要のはじまりの時に唱えられます。法要の鐘がカンカンとなりましたら、私が唱え始めますので一緒にお唱えをしていただきたいと思えます。

それでは、御詠歌についてのお話、練習の間を終わります。法要中と一緒に唱えをいたしましょう。

ありがとうございました。

不完全な自分自身を自覚して

山梨県 長泉寺住職 水庭 浩章

「人間は、そのまま完全である。しかし、そのままでいられる人など一人もいない。」

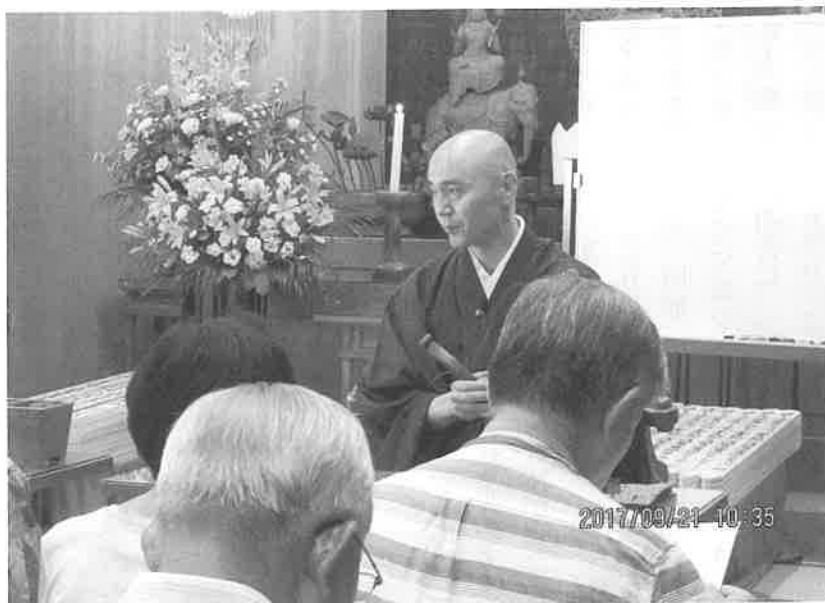
本当にそんなことが可能なのかが問題ではなく、この言葉が、仏教の根本であるということです。

人間は、そのまま完全である。皆様も私も、お互いにパーフェクトな存在です。しかし、残念ながらそのままでいられる人など一人もいません。

仏教の教祖、お釈迦様はお生まれになった直後に、右手で天を指差しし、左手で地を指差しし、「天上天下唯我独尊」とお唱えになられたと、後進の弟子たちによって伝えられています。

一見、非常に傲慢な言葉にも捉えられてしまいがちですが、この言葉は、決してお釈迦様お一人が尊い存在であると言っているのではなく、生きとし生けるもの誰しもが、皆平等に尊い存在なのだということを言っています。ひとりひとりが「天上天下唯我独尊」であるということです。

ですから、本来「人間は、そのまま完全で



ある。」のです。

しかし、そのままではいられないのが人間です。代表的なものが、貪りの心、瞋りの心、愚かな心、仏教ではその三つの心を「三毒」と言いますが、三毒にすぐに支配されてしまうのが人間なのです。

皆さんも、自分の胸に手を当てて思い起こしてみてください。心が落ち着いた状態でいても、すぐに不安定になってしまったことはありませんか。

恨んだり、僻んだり、嫉んだり、怒ったりと、穏やかな心はどこへやら、一瞬で変わってしまいます。その時、心は三毒に支配されています。では、なぜ私たちはそのままではいられないのか。それは、私たちが思惑や打算する心を働かせているからです。

その心がある限り、私たちは必ず何かと比較しながら、他者と比べながら生きていくことに

なります。自分のほうができるとかできないとか。恵まれているとかいないとか。

この、比べるという行為が、私たちの迷いの源になっているのです。

その迷いとは何処から来るのか。

それは、満たされることのない欲望を満たそうと思う心、逃れられない苦しみから逃れようと思う心からです。

お釈迦様は、この世は苦しみの連続であるとおっしゃいました。それは、生まれて苦難多き人生を歩む苦しみ、老いとともに身体が衰えていく、思うように動けなくなる苦しみ、時には病を患う苦しみ、これは本人のみならず家族も苦しみを伴います。同様に、生まれた以上、必ず死をむかえなくてはならない苦しみ、この「生老病死」の四苦に、「怨憎会苦」、自分が嫌いだと思う人、苦手だと思う人とも会わなければ

ばならない苦しみ、「愛別離苦」、大切な人との別れからくる苦しみ、「求不得苦」、自分の思い通りにならない苛立ちからくる苦しみ、「五蘊盛苦」、人間であるがゆえに様々な苦しみから逃れることができないという苦しみ、このことを「四苦八苦」といいます。

私たちは、これらの苦しみから逃れようともがいても、決して逃れることはできません。その苦しみをあるがままに受け止め、生きていくことの大切さをお釈迦様は説いておられます。

苦しみには必ず原因があります。その原因とは、先ほどもお話しいたしました満たされることのない欲望を満たそうと思う心、逃れられない苦しみから逃れようと思う心です。今置かれている現状は変わりません。その現状から目をそらすことなく、前向きに受け止めていくことが大切です。発想の転換です。どのように生きるでも同じ時間が流れるのですから。

その生き方の道しるべとして、お釈迦様は八つの正しいお言葉をお示しく下さいました。そのことを「八正道」といいます。「道」とは、「みち」ということではなく、「言う」という意味があります。ですから、八つの正しいお言葉ということですよ。

「正見」、世の中を公平に見る眼を持ち、「正思惟」、常に偏りのない思いを巡らせ行動し、「正語」、人を傷つけるような言葉を使うことなく、「正業」、悪いことはせずに善い行いを心掛け、「正命」、自分が生きていく意味を見失うことなく、「正精進」、世のため人のために生きることを誓い、「正念」、生きとし生けるものはみな平等に尊いものであるという意識を忘れることなく、「正定」、そのためには、いつでも静かな心、調った心でいることが必要である、ということをお示しです。

この、「八正道」の教えを意識し、実践している姿が「天上天下唯我独尊」、そのまま完全な姿であるということです。その時には、貪り、瞋り、愚かな心の「三毒」に代表される「煩惱」を抑えて、心やすらかな状態でいられるでしょう。実践していくことが大切なのです。

私たちは身体のような個所から情報を集めています。それは、目・耳・鼻・口・体・心の六つの認識作用から得る、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、知覚、このことを六識といっています。この六識によって、様々な情報を分別・認識・判断します。時には危険を感じたり、時には快楽を感じたりと。

私たちは、「八正道」でご説明したように、正しい理性を働かせ、正しく認識、判断しながら生きていくことが求められています。そのために、調った心、正しい知識を常に保つていく

必要があります。

同時に、私たちは「不完全」な人間であることも意識していかなくてはならないでしょう。

六識は、私たちが認識できる表面的な感覚作用ですから、意識的に抑えていくことはできません。

問題なのは、私たちの意識しないところ、つまり、潜在意識です。

この潜在意識は、大きく分けて二種類あります。一つは、私たちが生まれてから長い年月をかけて、生きてきた中で蓄積された知識や経験、時には親から聞いたこと、時には先生や友人知人から聞いたこと、また、最近ではテレビやインターネットの普及に伴い、そこからの膨大な情報などが心の奥底に存在し、無意識のうちに私たちの認識、判断に大きな影響を与えているということです。

私たちは無意識に様々なものをカテゴリー化しています。例えば、男らしさ、女らしさがそうですね。その定義は何なのか、はっきりした答えはないんです。だけど、男らしい、女らしいと何となく決まっていますよね。

小学校六年の息子がいるのですが、その息子が小学校入学前、ランドセルを買うときにこんなことがありました。

「何色のランドセルがいいの」と聞くと、即答で「赤」と答えました。私が小学校時代には「赤」か「黒」のランドセルしかなく、当たり前のように女の子は「赤」、男の子は「黒」のランドセルを使っていました。今ではいろいろな色のランドセルがあるんですね。おそらく息子は戦隊もののヒーローが赤だったから「赤」と言ったのだと思いますが、私の連れ合いが「赤は女の子っぽいから、違う色にしよう。」というので「えー、それじゃ、黄色」と答えました。

買いに行つた店に黄色いランドセルはなく、実際に黄色のランドセルが商品としてあるかどうかはわかりませんが、「それも女の子っぽいから」ということで、最終的には「青」に落ち着きました。

でも、男の子は「黒」や「青」で、女の子は「赤」や「ピンク」や「水色」のランドセルと決まっているように思えますが、その定義はと聞かれると言葉に詰まってしまう。

実際、息子に「なんで」と聞かれたときに、ちゃんとした回答はできませんでした。

また、公衆トイレの表示では、男性用は黒色・青色が多く、女性用は赤色が多いですね。皆様も駅や高速道路のサーブエリアなどで公衆トイレを利用するときに、青色と赤色のマークがあれば、本当に男性用かな、女性用かなと、人の形や書かれている文字まで確認しないでくださいね。自然と男性は青い方に、女性は赤い方に向

かうと思います。カテゴリー化は脳の省略化とも考えられ、実際に、私たちが生きていく中で、そのような習慣力は、日常生活で非常に好都合であり、大いに役立つと思います。

しかし、その潜在意識の中にある固定観念が、時に偏見となり、差別をしてしまうことがあります。

例えば、強面の人の容姿を見ると、「あの人は怖い人だ。近づかないでおこう。」とか、真面目そうな人を見ると、「あの人は信用できそうだ。」とか、見た目だけで判断することはありませんか。しかし、強面の人がみんな怖い人なのかというとそんなことはなく、真面目そうな人を見える人がみんな真面目なのかというとそんなこともありません。私たちは、長年蓄積された潜在的な知識だけで、その人の内面を見ようとせず、先入観だけで判断してしまうところがあるのです。

そのことが、差別の心を生み出し、人を傷つけてしまふこともあります。

そのような潜在意識があることを、自覚しながら生きていかなくてはなりません。

もう一つの潜在意識は、人間は本能的に自己中心であるということです。

この潜在意識がとても厄介です。

例えば、閉店間際のお買い物。

店内で間もなく閉店を告げる「ほたるの光」のBGMが流れている中、間に合ったと慌てて店に入る。目的の商品を手にとってレジに向かい、会計を済ませて外に出るころには、出入り口が人ひとり通れるだけ開いていて、駐車場にはほとんど車が止まっていない。車に乗り込み、エンジンをかけると、営業終了時間を十五分も過ぎている。

にもかかわらず、「間に合ってよかった」と

ほっとすることはあっても、対応して下さった店員さんに感謝することや、閉店時間を遅らせてしまつて申し訳ないという気持ちでできてこない。

もしかしたら、店員さんの中には、そのあと大切な予定があつた人がいたかもしれない。ご家族がいたら、いつもより帰宅が遅いのを家で待っている人がいるかもしれない。

私はそのようなことを一度や二度ではなく、幾度となく、自分では悪気なく、無意識に「当たり前」だと思ひ込んで繰り返してしまいました。

そのことに気づかされたとき、自分自身が情けなく、本当に反省をしました。

当たり前だと思つていたことが、実は当たり前前のことではない。そこには人々の自己犠牲と奉仕の精神がある。そのことに思いを廻らせなければなりませんね。

「自分がいなければできないと思うことは独善である。」

これは、私の上司役の和尚様が、常々いわれるお言葉です。

「独善」とは、字のごとく「独り善がり・自己中心的」ということでしょうが、この上司の言葉が私の意識をがらりと変えてくれました。

私は、和尚になる以前から、他の人には負けない、自分にしかできない力をつけることを目標に生きてきました。

それが、自分が生きていく手段にもなるし、「この和尚は特別だ。」と思われれば、お寺の為にもなると思つて。

上司の言葉は、今までの私の生き方とは正反對の言葉ですが、その理由を聞いて納得致しました。

私は、先程ご紹介いただきましたように、現

在、東京都港区にあります大本山永平寺別院長谷寺という修行道場に、修行僧の指導役として身を置き、間もなく三年が経とうとしています。

就任当初は、修行僧のお手本とならなくては思い、また、同じ修行道場にいる和尚様方からも早く認めてもらいたいと思い、自分にしかできないことを考え、そのことを目的としていました。

しかし、そんな私の心の内を読まれたのか、上司と二人で話しているときに「自分がいなければできないと思うことは独善である。」といわれました。

その理由は、私たちはそれぞれ自分の住職地や副住職地があり、修行僧の指導役として一定の任期を勤めています。後任の和尚様が入ってきて、同じように指導していかななくては修行僧を迷わすだけになってしまいます。

しかも、この世は無常で、いつ何時自分のい



のちが尽きるかわからないお互いです。その時に、自分一人で抱え込んでしまっていては、残された人が困るでしょう。誰がその役にあたっても困らないように、そのことに思いを廻らせていくことが大切だと教えられました。

その上司の教えは、早速私の身の回りですることができました。

私にも住職を務めているお寺があります。しかも二か所。一か所は、山梨県甲府市にある長泉寺というお寺。もう一か所は甲府から車で一時間ほど離れた山梨県都留市にある永寿院というお寺です。

修行道場就任にあたり、二つのお寺のお檀家様にもご理解していただく必要があります、その話し合いの席で、甲府のお寺は私の連れ合いが管理し、都留市のお寺は、近くに住んでいる私の両親が管理をするということになりました。

その間、お檀家の役員様を中心に、行事の準備や清掃などをしていただけることになりました。

非常に有り難く、そのお陰で、私は修行道場に就任することができました。

ある時、住職である私に何の相談もなく、檀家の方の奉仕で清掃する日が決められました。

「えっ、その日は帰れませんか。」と私が言うのと、役員さんから「いいよ、方丈のことは当てにしないでいいから。」とか、「いても大した戦力にならないから。」と言われました。口は悪いですが、これもお檀家様のやさしさだと感謝しております。

こんなこともありました。昨年の夏、あるお檀家様がお父様の年忌法要をすっかり忘れていて、直前に申し込んでこられました。その時に、受け付けた私の連れ合いに対して「方丈さん忙しいだろうから、奥さんでいいよ。真ん中に座

っていてもらえば、あとは自分たちで鐘や木魚を鳴らして、みんなでお経を読むから。」と言われました。

それには、さすがに私の連れ合いも困ってしまつて、私に連絡があり、確かにその時期は忙しかつたのですが、外出の許可をいただき甲府に帰りました。

法要の準備をしていると、そのお檀家様が来て私の顔を見るなり、「なんだ、方丈さんいるのかよ。今日は奥さんに勤めてもらえろと思つて楽しみにしてきたのに。」と、明らかにガツカリした様子でいわれました。

なんだよ、せっかく帰ってきたのにとの思いもありましたが、それよりも、私が留守をしていても、お寺を支えて下さっていることを感じ、とてもうれしく思いました。

法要は、少しそのお檀家様の思いに添えなかつたかもしれませんが、私の連れ合いにも参加

してもらい、みんなで法要を築くことができました。

しかし、私が住職地であるお寺を空けて一番困ったのはお檀家様のお葬儀のときでした。私が住職をしている地域は、お檀家様がお亡くなりになられた連絡を受けると、故人様の枕元で読経をする「枕経」の習慣がある地域です。

同じ町内に二つのお寺があり、一つのお寺では枕経のお勤めをするけど、もう一つのお寺では住職が普段留守だからという理由で枕経には伺えないというわけにはいきません。

とは言え、修行道場に身を置いている以上、すぐに駆け付けることも出来ず悩んでいました。

いろいろと考え、お檀家の役員さんにも相談して、枕経には私の連れ合いと、役員さん一人がついて伺うことに決めました。連れ合いも、最初は抵抗があったのか渋っていましたが、最

終的には覚悟を決めてくれました。

枕経では、読経するだけでなく、葬儀の打ち合わせ、故人様の生前の様子などをお尋ねします。その流れを、連れ合いに事細かく説明し、連れ合いも一言も漏らさずにノートに書き記していました。

ところが、いざその時が来ると、私は心配で仕方がありませんでした。連れ合いに「大丈夫か。あれは持った？、これは持った？、これこれこうやるんだぞ。」と言ったり、「なんとか時間をつくって私が行こうか。」とまで言いました。すると、連れ合いが電話口でこう言いました。

「そんなに私のことが信用できないの？ そんなに任せられないの？ だったら最初から修行道場就任の話は受けなければよかったです。こうやっていこうとみんなで決めたのだから私に任せて」と叱られました。

「自分がいなければできないと思うことは独善である。」

最初にお話しいたしました上司の言葉。まさに、私の言動は「独善」でした。

何でも自分ができれば安心できるし、また、自分にしかできないことがあれば自分の立場を守ることもなる。皆様も、そのような思いをされたことはないでしょうか。しかし、自分がいなくなった時のことを考える人は、意外と少ないような気がいたします。

その考えが、時に後継者の成長を妨げたり、人に不快の念を抱かせたりしてしまうこともあるのではないのでしょうか。

すべてのことを自分一人の力ではどうすることも出来ない。なぜなら、この世は無常であり、一瞬たりとも同じ状況で留まっていけないのですから。いまあるこの命も、明日にはどうなっているのかわからない。そのことに目を向ければ、

「独善」ほど無責任なことはないですね。

一緒に行っていたいただいた役員さんから、「奥さんは緊張しながらも、大きな声でお経をお唱えされていて、打ち合わせの時も安心して見てられましたよ。」とお聞きいたしました。

お葬儀の後、喪主さんに「この度は、枕経に私が伺えなくてすみません。」というと、「いえいえ、奥様に丁寧にお勤めいただいたので、おばあちゃんも喜んでいると思いますよ。」と云ってくださいました。

それからは、枕経のときには、安心してといえは嘘になるかもしれませんが、連れ合いを信じてお任せいたしております。そのことが、今の私たちにできる精一杯の形です。

いまお話しいたしましたことは、まさに私の潜在意識の中にある、本能的な自己中心の現れです。

人は一人では生きてはいけません。必ず他者にすがりながら生きています。食べるものにしても、身に着けているものにしてもそうですね。みんな、お互い様のなかで生きています。そのことに目を向ければ、自分勝手に生きていくことがとても愚かなことだと思えますよね。

福井県の大本山永平寺、今私が勤めております永平寺東京別院の本院に当たってお寺ですが、その永平寺をお開きになりました道元禪師様がこんな詩を残されております。

私が山を大切にすると、

山も私を大切にしてくれる。

大小の岩や石も、

休むことなく語りかけてくれる。

白い雲や山の木々の移り行きの中で、

すでに俗世間の煩わしさは

忘れ去ってしまった。

大自然のなかの永平寺で詠まれたこの詩は、道元禪師の山に対する愛、山を自分の身に引き比べて、山と一体になって生活していた姿を窺い知ることができます。

「私が山を大切にすると、山も私を大切にしてくれる。」という「山」は、「自然」や「環境」に置き換えることができます。また、「他人」にも置き換える事ができます。

「他人」を大切にすると、「他人」も私を大切にしてくれる。直接的なこともあれば、間接的なこともあるでしょう。すぐに結果が見えることもあれば、将来に結果が見えてくることもあるでしょう。自分が思いもよらないところから恩を受けることもあると思います。大切なことは、見返りを求める心を起こすことなく、「八正道」の実践を行っていくことです。

世の中を公平に見る眼を持ち、常に偏りのない思いを巡らせ行動し、人を傷つけるような言葉を使うことなく、悪いことはせずに善い行いを心掛け、自分が生きていく意味を見失うことなく、世のため人のために生きることを誓い、生きとし生けるものはみな平等に尊いものであるという意識を忘れることなく、いつでも静かな心、調った心でいる。

ただただ、八正道を意識して行じていく。そのことが、みずから意識しようとしてもどうにもならない潜在意識を、おのずからコントロールすることができるようになります。

「人間はそのまままで完全である。しかし、そのままでいられる人など一人もない。」

その「不完全」な自分を自覚しながら、「八正道」に沿った生き方をしていく。無意識の潜

在意識をもしっかりとコントロールしていく。その姿が、「そのまままで完全な自分」であり、決して比べることのできない尊いお互い様です。

本日は秋彼岸の二日目です。彼岸とは、どちらにも偏らない、自分と他人とか、そういった垣根を取り除いた状態です。そのときには、みずから関わる世界が、おのずから彼岸になる。つまり、安楽の世界になります。

先ずは、この後の彼岸法要。分け隔てなく、平等に供養をするお姿を、ご先祖様方に示してまいりましょう。



宋山五年賦天



大本山永平寺参拝記念 横浜善光寺本山参拝団 平成29年5月18日

◇御誕生寺◇



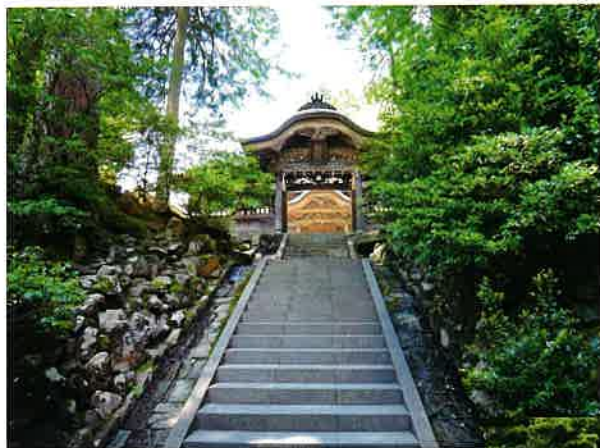
板橋禅師と共に



◇丸岡城◇



◇ 永平寺旅行 ◇



入祖堂證

善光二世中興大圓武志大和尚

夫當本山者 高祖承陽大師所
謂盡未來際不離當山境而常住
法身之靈域也依之所建品位則
日夜奉觀面授 大師者也

平成十九年五月十八日

大本山永平寺



節分会
2月3日



幫間芸
悠玄亭玉八師匠



新年に続き
和太鼓 大元組



川島雛子保存会による
笑いあふれる、
おかめとひよっこ



大元組による
和太鼓
お腹にズシンと
響く大迫力！



新年祈禱会

1月9日

獅子舞と和太鼓による新年の幕開け



■恒例 善光寺旅行会

平成二十九年五月十七日・十八日

大本山永平寺参拝

く大圓武志大和尚入祖堂法要く

恒例の善光寺旅行会、今年は曹洞宗大本山永平寺参拝、新緑の季節、住職はじめ総勢三十九名、一泊二日の参拝旅行でした。

五月十七日、五月晴れの空のもと羽田から空路小松空港へ。バスへ乗り換え、初日の参拝地御誕生寺へと向います。

福井県越前市にある御誕生寺は曹洞宗太祖瑩山紹瑾禅師の生誕地にあり、曹洞宗の僧侶を育成する専門道場です。数多くの猫が暮らすことから「ねこでら」として人々に親しまれています。

現堂長板橋興宗禅師は曹洞宗元管長で大本山總持寺元貫首でもあられます。禅師様は善光寺先代住職とも親交深く、清水寺の瑩山禅師顕彰碑開眼法要の導師もお務め頂いております。また顕彰碑の題字も禅師様の揮毫です。

本堂にて御山内僧侶全員での善光寺参拝団の健勝を御祈祷頂き禅師様より思い出話を混じえた有り難い御法話を頂きました。

『心配しなさんな。悩みはいつか 消えるもの』板橋禅師近著（秀和システム発行）にも語られておりますが、「人生に無駄はない。苦を知ってこそ、人間は深まるのです。」とのお言葉に、ふと善光寺先代方丈が良く口にしていた言葉を思い出します。

「人生に善し悪しはないんだ。ただ今、おかれているその場所で精一杯のことをしたらそれでいいんだ。人生に無駄はない。精一杯やるか、やらないかだ。精一杯やっていたら必ず無駄に



はならない」。

禅師様の穏やかな語り口に、先代方丈から力強く教わった事を思い起こしました。

この旅行は、先代方丈様のお位牌を大本山永平寺ご開山道元禅師御廟・承陽殿にお祀りするための法要（入祖堂）が目的。

禅師様のお言葉「起こることに、幸も不幸も

ない。ただあるがままに生き、毎日を『好日』にいたしましたよ」というお話にますます先代方丈様を重ね合わせました。六十歳で大病を患い、それからは病氣と二人三脚の生活ですと微笑まれる禅師様。「どう死ぬかより、どう生きるかが大事。死んだあとのことは死んでから考えよう」と示されるお言葉に、これから向かう永平寺の元貫首宮崎奕保禅師様が語られたお言葉を思い出しました。

「正岡子規の『病牀六尺』という本には、人間は、いつ死んでもいいと思っておったのが、悟りだと思っておった。ところが、それは間違っておった。平気で生きておる事が悟りやっただと書いてある。何時死んでもいいと思っておったのが、悟りやっただと。ところが、いつ死んでもいいどころではない。平気で生きておることが悟りやっただと。分かるか。死ぬ時が来たら死んだらいいんやし、平気で生きておれる時は、

平気で生きとつたらいいんや」(『坐禅をすれば善き人となる』石川昌孝著 講談社)

一〇八歳で御遷化(亡くなられる)されるまで、一生修行された禅師様のお言葉です。修行僧の私達よりも朝早くから坐禅を組まれているお姿と、永平寺の凜とした空気を思い起こし身が引き締まりました。

記念撮影ののち、僧侶の皆様と多くの猫たちに見送られながら次の目的地丸岡城へ出発。

国の重要文化財に指定された天守閣は現存する最古のものとされています。急な階段を登



った先で一望した景色は格別でした。初日の最後はあわら温泉。旅の疲れを癒し、明日拝登する大本山永平寺に思いを馳せて身を清めます。

翌日も快晴に恵まれ、バスで一路大本山永平寺へ。

永平寺は、今から七百七十三年前の寛元二年(一二四四年)、道元禅師様によって開創された曹洞宗の大本山です。溪声山色豊かな山間に七堂伽藍を中心とした殿堂が建ち並んでいます。博志住職もここ永平寺で修行されました。今も多くの修行僧が、日夜修行に励んでいます。

境内は約十坪。樹齢七百年といわれる鬱蒼とした老杉に囲まれた静寂なたたずまいに自然と背筋が伸びます。法要前に控室で休憩していると、法要へ随喜するため早朝善光寺を発つた副住職も到着。諸堂を拝観しながら法堂へ。法堂では大勢の修行僧随喜のもと入祖堂法要が厳粛に執り行われました。住職を始め善光寺より随喜した僧侶も大勢の永平寺の僧侶と共に法堂でお経をお唱えしながら歩く姿は壮観でした。



『神奈川県善光寺二世中興大圓武志大和尚……』と導師様がお唱えする声も胸に篤く沁みました。

法要後、精進料理を頂き、心もお腹も大満足。門前町でお買い物の一時を過ごし、小松空港から帰路につきました。天候に恵まれ、一切事故もなく老若男女皆仲良く楽しい有意義な参拝旅行でありました。

永平寺旅行

参加者のおたより

東京都大田区 齋藤貴美様

旅行会社の広告で永平寺への参拝旅行を目にするたび、一名では参加不可とのこと、長年残念な思いを重ねてまいりましたが、今回、善光寺の先代方丈様の御法要という形で参拝が叶



い、仏縁のありがたさを感じました。

永平寺の名前はよく知っておりましたが、これほどまでに山深い場所で、年輪を重ねた木々の間に建物が点在している様子に感動いたしました。大勢の僧侶に、修行僧が朗々と読経しながら法堂内を巡る御姿は素晴らしく、光り輝いているようにでした。

神奈川県横浜市 瀧澤道子様
初夏薫風の候 永平寺参拝旅行の際は大変お世話になり感謝申し上げます。また、記念写真をお送り頂き重ねてお礼申し上げます。

祈願読経は堂内に響き心地よく、満願成就を祝しているようでした。若い修行僧の方の優しいまなざし、きびきびした動作に道元禅師さま瑩山禅師さまの教えを守る熱意を感じました。本当にありがとうございます。善光寺様の益々の御活躍、御発展を心より御祈念申し上げます。

合掌





神奈川県横浜市 飯塚征子様

この度は大変お世話になりました。また、本日は写真をお送り頂きまして誠にありがとうございます。ございます。

永平寺様での昼食、その他個

人では実現し得ない体験をさせて頂き感謝しております。御誕生寺ご住職様のお言葉「愚痴をもらさないぞ…」を私も日々の生活の中に努力していきたいと思いました。まずはお礼まで申し上げます。



東京都 小山コウ様

浅草の三社様の祭りも近かったので永平寺の参拝旅行迷いましたが、二日間とも良い天気で行くことが出来、又、楽しく久しぶりのお友達とも逢うことが出来、皆さんの元気な姿を見てうれしい思い出の一つとなりました。これも善光寺さんのおかげだと感謝でいっぱいです。又、



早々に立派な写真をお送りいただきありがとうございます。



神奈川県横浜市 飯村信子様

拝啓 清々しい初夏を迎え、
木々の緑も日増しに深くなつて
まいりました。ご一同様にはな
お一層お健やかに過ごしのこ
とと存じます。先日の永平寺参
拝旅行、お世話様でした。また、
お写真をありがとうございます
た。前日も今回も楽しい旅でし
た。永平寺本堂にての法要に参
列させていただいたのは、身に
あまる光栄でした。感謝申し上
げます。時節柄、ご自愛くださ
いませ。

敬具

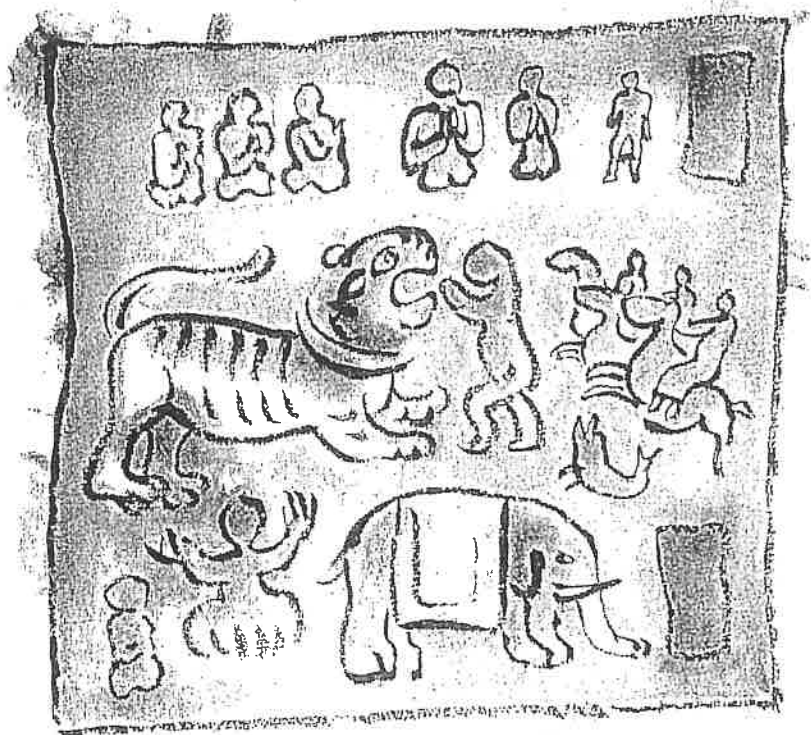
神奈川県横浜市 奥津光子様

前略 いつもお世話になって
おります。又、旅行の写真を送

つて頂きありがとうございます
た。善光寺様の旅行に初めて参
加させて頂きました。とても
楽しい旅行でした。永平寺参拝、
感謝の気持ちでいっぱいです。
ありがとうございます。今後
ともよろしくお願い致します。







*The story of Grahams
9th century*

先代方丈黒田武志老師が発願し発刊された『成寿』も四十七巻を数えます。

檀信徒の皆さまに親しみを込め、解り易く仏教を説き続けた先代方丈さまのお心を今一度追慕し『成寿』に掲載されたお話を再録させて頂きます。

元号が平成に代わった一九八九年、善光寺留学僧育英会は五年目を迎えその活動が注目されるようになりました。立正佼成会の庭野会長との対談に先代方丈さまのお人柄や情熱が伝わって参ります。

立正佼成会・庭野会長と対談

世界に活眼を開く人材を育成したい

庭野先生のご活躍に感銘

庭野 あなたのご活躍は『中外日報』などにも紹介されていて、以前からお会いたいと思つていました。

黒田 光栄です。私も、庭野先生のご著書を全

巻そろえておりまして、先生のご業績を存じあげているつもりです。それに私は、大聖堂に参上するのは二度目でございます。



庭野 そうですか。

黒田 昭和三十九年の、大聖堂の落成式典に連なりました。当時、私の父の黒田白純が全日本仏教会の事務総長をしていて、落成式典に曹洞宗の代表としてお招きをいただいたのです。私は總持寺（横浜市鶴見区）で修行中でしたが、父が「佼成会はいまに世界の佼成会と呼ばれる教団になるはずだから、おまえも勉強のために行きなさい」というので、若輩ながら参列させていただきました。

庭野 なにか参考になりましたか。

黒田 それはもう……。私どもが大聖堂の玄関で車から降りますと、おたすきをかけたご婦人方が整列されていて、非常に丁寧に案内してくださいました。その一挙一動に信仰の深さを感じ出ているんですね。そういうご婦人方を見たのは初めてで、「ほんとうの信心を持たれているなあ」と強い感銘を受けました。以来、庭

野先生のお姿を遠くからお見受けする機会は何回かございましたが、本日は直接お話しすることができて、たいへんありがたいことと思っております。

庭野 それはどうも……。黒田先生は、私どもが進めている世界宗教者平和会議と同じように、宗教協力を進める事業を計画されているそうですね。

黒田 世界宗教者平和会議に代表される庭野先生のご活躍は、すでに世界的な評価を得ています。それに比べればアリのように小さなことです。私には世界にひろめたいという願いがあるわけです。それにはまず、仏教徒として海外で活躍できる人材の育成が肝心だと考えまして、ささやかながら実践活動をつづけております。

庭野 ほんとうに立派なお仕事ですね。

黒田 庭野先生は、法華経の教えにもとづいて

世界平和の実現を推進されています。私は禅僧ですが、毎日、法華経の写経をしていて、いわば法華経を心のよりどころにしているわけです。法華経の実践面でいえば、庭野先生と藤井日達先生が現代仏教のなかで最高の指導者だと信じてきました。

庭野 これはどうも……。黒田先生はたいへん行動的な方で、いまなさっているお仕事は海外派遣僧育英会でしたね。そのお話をうかがいましょう。

一口運動の実践

黒田 私は駒澤大学の大学院を出てから鶴見の總持寺や福井の永平寺で修行し、仏舎利奉拝行脚を志して日本一周しました。それからタイに留学したり、アメリカで向こうの人と坐禅したりして、比較的長い期間、海外で生活してきました。日本にもどり、横浜に善光寺という小ざ

な寺を開きました。十八年間で予想以上の檀家さんもでき、寺として一応の基盤がまとまりました。そこで報恩行の一端として、海外に派遣する留学僧を育成するため育英会を設立したわけです。この四月で五回生が生まれました。

庭野 たしか、育英会の留学僧は宗派や国籍、男女の別を問わないことになっていきますね。中国の方も韓国の方もいらつしやるとか……。失礼ですが、育英資金もたいへんでしょう。

黒田 はい。佼成会では「一食運動」を進めています。私どもでは、二千数百戸の檀家の方々に「一食ささげてほしい」とお願いしても、なかなかむずかしい。あれは庭野先生のような大指導者がいらつしやるから可能なのです。そこで、毎食一口だけ節約するという「一口運動」を提唱しました。一口というのと、一食あたり一家族で約十円の節約になります。そういう浄財を喜捨していただいて、一年間で相当の額にな

ります。

海外での修行を通じて広く世界に活眼を開く人材を育成したい。それと同時に、少しでも多くの世界の方々に、お釈迦さまの教えをひろめたい……。そうした大きな望みを、私に相応した次元で展開しております。

庭野 仏法がひろまるかどうかは人材いかによりますからね。正しい話がひろまらないと、国は栄えない。同時に、法をいきいきとしたものにするのは、その人の実践いかんによるわけです。

黒田 ほんとうに同感です。日本は世界最大の仏教国でありながら、世界の大勢に即応して教化の実をあげるシステムに欠けています。私は、その面でも人材育成の重要性を痛感しています。それも、国際感覚の豊かな人材の育成が望まれているわけです。

庭野 私のところにも、学林という教育機関が

あります。大学を卒業した青年が仏教を専門的に学ぶところですが、学林を出た青年がほとんどヨーロッパへ行っています。この青年たちが向こうで法華經の講義をしてくるのです。バチカンで一年ほど勉強させてもらい、キリスト教の教えを学んだうえで、ヨーロッパ諸国の教会や学校で法華經の教えを説くわけです。

黒田 私のほうは微々たる力ですが、息ながくつづけていきたいと思っています。日本を救うためには世界を救わなくてはなりませんから……。

庭野 そのとおりですよ。日本だけ救おう、日本だけよくしようとしても、そうはならない。世界を救おうという気持ちになれば、自然と日本もよくなつていくのです。そして、ほんとうに世界を救おうとなると、仏教の教えをひろめるのがいちばんの早道なのです。

もつとアジアを大切にしたい

黒田 庭野先生は、世界宗教者平和会議と同時に、アジア宗教者平和会議を進めていらつしゃいますね。

庭野 世界宗教者平和会議の第二会議がベルギーで開かれたとき、「アジアの宗教者だけで平和会議を開きたい」という声が出てきたわけです。

黒田 私はタイで修行してきたこともあって、その経験から日本の宗教者も、そして日本のみならずも、もつともつとアジアを大事にしなればならないと思っています。

庭野 いまは、政治家や経済界の人たちも、欧米にばかり目が向いていますね。そういう欧米一辺倒の姿勢ではなく、アジアやアフリカのよいうに、困難の多い国々のことを大事にしてほしいですね。

黒田 私が残念に思うのは、たとえばビルマ、

ラオス、カンボジアなどの伝統的な仏教国で、
仏教が衰退していることです。日本人はアジア
にもっと目を向けるべきですが、われわれ仏教
者の側にも、仏教を通じてアジアの問題解決に
尽力しようという視点や実践が、まだまだ足り
ないのではないのでしょうか。

庭野 とくに発展途上国では教育の充実が急務
ですから、そういう考え方がポイントになりま
すね。ですから、その国の宗教者と力を合わせ
て正しい教えを守る人間を育てていくような、
精神的な援助も必要ですね。

黒田 「和を以て貴しと為す」ですね。庭野先
生がおっしゃるように、法華経の精神による宗
教協力を進めていく。そして「生まれてきてよ
かった」「安心して死ねる」といえるような状
態を、私たちみんながお手伝いをしてつくり出
さなければなりません。

庭野 あなたがタイで修行されたことで思い出

しましたが、「これは恐れ入った」と感服した
ことがあります。

黒田 私のことですか……。なんでしょうか。

庭野 宗教家がいちばん導きにくいのは家族で
す。ところが、あなたはお子さんたちを、タイ
のお坊さんのもとで上座仏教の得度をなされ
た。

黒田 私は子どもたちに、「ただ素直になれば
いい。もし、修行のために倒れるようなことが
あってもいい。とにかくがんばりなさい」と言
いきかせています。

庭野 他人に説法するのはわけではないけれど、
自分の妻や子どもを心から納得させるのは容易
ではありません。それを黒田先生はみごとなさ
っている。

黒田 家族だと思うと、これはむずかしい。で
すから私は女房に「仏さまからお授かりしてい
る養子みたいなものだ」といってます（笑）。

もつとも、そういう意味では庭野先生は世界一の養子になりますね。

庭野 自分が尊敬するお師匠さんにお子さんを預けて、厳しい戒律をしつかり守らせる。それを奥さんにも承知させて、お子さん四人にタイ式の得度をさせられた。非常に尊いことですね。
黒田 先生にほめていただけて、人生でこれ以上のことはありません。

庭野 先年、バチカンからご招待があつて、私の長男が孫をつれて行つてきました。私は前の教皇さまの時代からバチカンとは親しくさせていただいています。私の信仰を長男が引き継ぎ、三代目の孫たちも法を守つていくというところで、教皇さまが祝福してくださいました。孫たちにはほおずりしてください、しっかりと歩んでいくよう励ましてくださつたというのです。

黒田 それはすばらしいですね。

庭野 帰国して孫が「おじいちゃんつて偉いんだね。教皇さまが偉いとおっしゃつた」という（笑）。急に尊敬されるようになりました。

黒田 尊いことですね。

説く人と聞く人が一体になる

黒田 私のところでの話ですが、玄関の履き物は子どもにそろえさせました。子どもが黙つてそろえていると、私は「声を出して『履き物を直させていただきます』といいなさい」と教えました。黙つて直すよりも、口で「させていたたく」といつて実行することが大事と思ひまはつてね。

庭野 結構なことだと思いますね。鎌倉仏教の祖師方でも、法然上人や親鸞上人はお念仏を唱え、日蓮聖人はお題目を唱えることを教えられました。心でわかっただけで、口で唱えなくてもいいのではないかという考え方もあります。

が、実際に口で唱えることで、お題目やお念仏と一つになりきれれるのです。口に発露することが非常に大事です。

黒田 おっしゃるとおりです。禅には禅の修行としての形がありますが、これは一般の方には少々むずかしい。一方、「南無妙法蓮華経」「南無阿弥陀仏」と唱えるのは、だれでもが実行しやすいことですね。

庭野 自分が選んだ信仰ですから、それを言葉に発露するのは自然ですし、ごく当然のことですよ。

黒田 庭野先生は信者さんの前でいつも熱心に法を説かれていますね。たいへん尊いことだと思っっています。説く人と聞く人が一体になるところに、仏法が受け継がれていくのだと思うのです。

庭野 それに、わかりやすく説くことが大切ですね。

黒田 私は、法華経をじっくり読めば、先祖供養の大切さを教えているように思えるのです。

そして、法華経の教えの中心はやはり「自我偈（如来寿命品の偈文）」になるのではないでしょうか。

庭野 「自我偈」は久遠の本仏の常住説法を教えていますからね。もつとも、法華経は二十八品どこを読んでも、この教えを実践する人はさまざまな功德が得られるというか、「かくすればかくなる」ということをことこまかく説いています。

黒田 道元禅師も「法華経は諸経の大王なり」と説かれています。私自身未熟でわからないことだらけですが、法華経が最高の經典の一つであることは、道元禅師の言葉からも庭野先生のご著書からも理解できます。

庭野 しかし、なにごとくも実践がともなわなければなりません。あなたの実践力はすばらしい

なと感嘆しております。

黒田 私は庭野先生の真似ごとをさせていただいているだけです。それも、規模の小さい形で……。先生のお徳を多少なりとも頂戴できればと存じております。

庭野 多少どころか、黒田先生のなさっているお仕事は立派ですよ。仏教がどれほどすばらしい教えでも、海外へ出て行って布教のできる人がいなければ、世界のすべての人を幸せにするという願いも果たせません。そういう人材の育成に力を入れることは、ほんとうに尊い事業です。ご健闘をお祈りします。





一 齊法要のご報告

〔平成二十九年〕

○新年祈禱会

本年の善光寺は、和太鼓の勇壮なリズムでスタート。テレビや舞台演劇、セッションライブなどで国内外を問わずに活躍のプロ和太鼓チーム「大元組」による演奏。

人が太鼓のリズムに胸が高まり、また安らぎを感じるのには、その音が「生まれる前に聞いた母親の心臓の音に似ているから」といいます。生命の始まり、生きる喜びを感じさせる和太鼓から始まる新年の幕開けに、お檀家の皆様も心弾ませ、その力強さと表現力に魅了されていました。

続いては昨年に引き続き、川島囃子保存会に

ニ ュ ー ス ・ ア ラ カ ル ト



よる獅子舞。躍動感の中に垣間見える愛嬌ある姿で、私達の心の邪気も晴れ晴れと払ってくだ
さいました。



○節分祈禱会

節分追儺会のご祈禱後には、昨年の大変好評につき今年もアンコールした幫間芸の悠玄亭玉八師匠。ご参加いただいた方々もお腹を抱えて笑っており、冬の寒さを吹き飛ばし、善光寺に福が来しました。

引き続きでは、地響きのような太鼓が打ち鳴らされ「大元組」の演奏が始まり、新年に引き続きの奉納演奏でしたが、何度聞いてもそのすさまじい迫力に心が踊りだしました。

興奮冷めやまぬ内に、最後は恒例の豆蒔きで締めくくり。住職を筆頭に大元組も一緒に檀家さんと共に声高らかに「シャン、シャン、シャン、オシャシヤのシャン」といつもの掛け声。賑やかな節分追儺会となりました。

— ニュース・アラカルト —



○春彼岸法会

法話 曹洞宗梅花流特派師範

渡邊清徳老師

今年からはじまった御詠歌教室。心やすらぐ御詠歌に親しんでもらいたいと講師の渡邊清徳老師にお話を頂きました。発声練習から始まって、皆さまと一緒にお唱え頂きました。



「まごころに生きる」と「三宝御和讃」をお唱えしながら、穏やかなリズムと共に仏さまのみ教えが心に浸透していく時間でした。

(渡邊師の法話は54ページをご覧ください)



○五蘭盆施食会

法話 曹洞宗梅花流特派師範

渡邊清徳老師

春彼岸に続き渡邊清徳師に御詠歌の指導とご法話を頂戴致しました。

孟蘭盆会では「追善供養御和讃」と「まごころに生きる」のお唱えを中心にご指導頂きました。「追善」という言葉の意味合いを含め、御



先祖様に思いをはせるこのお盆の期間をどのように過ごしたらよいか、丁寧に分かりやすくお話をいただきました。改めて日常の中で無常を觀じ、他が為に心を運んでいくことの大切さを学びました。



○秋彼岸法会

法話 大本山永平寺別院長谷寺知客

山梨長泉寺住職 水庭浩章老師

「人間は、そのままで完全である。しかしそのままでいられる人など一人もない。」という言葉を冒頭に示され、「そのままであることのできない一人」である自分自身の葛藤と気づきをテーマに分かりやすい法話を頂戴いたしました。

私達の無意識の中にある自己中心的な部分（末那識）と、経験をもとに蓄積された先入観（阿頼耶識）を改めて見つめ直し、その不完全な自分を自覚しながら八正道に身を投じていくことの大切さ、またその姿そのものが完全であるという仏道修行の根幹に迫る内容で、自らを見つめ直す機会をいただくことができました。

（水庭師の法話は70ページをご覧ください）

ニュース・アラカルト

八月末より住職が無言の行。声帯を痛めて発声を控えるようにとの事。秋彼岸法要は副住職導師にて執り行われました。

住職曰く「当たり前のように思っていたことが当たり前ではなかったことに気付かされ、健康の有り難さを痛感しております。この体験も仏さまから与えられたものとして受け止め今、出来る事を日々精進して参ります」と。

実は先代様も声帯を痛めた時期がありました。そこまで先代様の真似をしなくてもよいのにとの声も……。早く治してまた一緒にお経をお唱えしますと仰っております。



○身代り不動明王大祭 五月二十八日

昨年に引き続き米陀麻美さんによるフルート、そして今年は楽友、亀井美好さんによるハーブとのコラボレーションでの奉納演奏。「楽器の王様」と表現されるフルートの音色と、ヒーリング音楽などにも使われるハーブの響きが参加者の心を癒やしてくれました。



— ニュース・アラカルト —

「ハナミズキ」愛の讃歌「川の流れるように」など、ポピュラーな曲も織り交ぜながら、フルート奏者の中では特に大切にされている楽曲「歌の翼による幻想曲」なども演奏して下さいました。アンコールでは善光寺の定番「マイウェイ」を演奏。先代方丈様が好まれたマイウェイの調べが不動殿に響きわたり大祭に彩りが増しました。



山口義男氏が護持会会長に

山口氏は善光寺開創前からの先代住職のご友人で、昨年迄長く青年会会長をお務め頂いておりました。この度前任の國廣敏郎氏の退任を受け山口氏が善光寺護持会会長に就任しました。

「私はどちらかというと『五時ごじ（から）快調かいちょう』をモットーにしています。が……」と笑う山口氏。一斉法要では経本を配ったり椅子を出したりと色々とお手伝いを頂いております。

また旅行にも毎回参加頂き盛り上げて頂いております。明るいご性格で「これからも皆さんと一緒に和やかに善光寺を盛り上げていきたい」と抱負を語られております。今後共よろしくお願い申し上げます。

ニュース・アラカルト

震災義捐金の御礼

今年も皆さまよりお納め頂いた尊い浄財、護持会費の一部を四月十七日、國廣護持会会長と共に神奈川県厚生文化事業団を訪れ日本赤十字社へ寄付を致しました。



ホームページ スマホ版開設

善光寺のホームページをリニューアルして、スマートフォンに対応できるようにしました。従来のページと併設して開設しています。

URL: <https://y-zenkouji.com>



坐禅研修会

善光寺では企業研修や団体での坐禅会も承ります。毎年恒例の坐禅会として二月十九日(日)、ボーイスカウト坐禅会が行われました。今年も早朝の冷え込ませ中、親子合わせて八十余名の

ニュース・アラカルト

方々が参禅。

九月十六日には企業研修として関東平車重量部会様の坐禅会も行われました。

ご質問や、お申込などお気軽にお問合せ下さい。



朝いち禅開催

今年一月より「朝いち禅」を開催しています。月曜日から金曜日の平日午前六時半から一時間、僧侶とともに坐禅と読経を行います。参加者の中には、「生活の一部です」と仰る方もいて、ともに修行する仲間が増えていくことに喜びを感じます。初めての方もご指導致します。お気軽にお越しください。

戸澤洋太師住職を拜命

博志住職の弟子、戸澤洋太師が今年一月、千葉県富津市天祐寺の住職に拜命されました。

在家出身の戸澤師は善光寺の早朝坐禅会に三年間通い、機熟して平成十九年に黒田博志住職

ニユース・アラカルト

の弟子となり出家。加賀大乘寺にて東隆眞老師のもと三年余り修行され現在は善光寺にて共に修行しています。戸澤師の今後益々のご活躍を祈念申し上げます。



善光寺霊園ニュース

横浜やすらぎの郷霊園

「お墓の掃除は心の掃除」。

どうぞごゆつくりお参り下さい。

そして「やすらぎの郷にお墓参りに来たら、帰る時には元気がでてきた。」そんな言葉が私達の喜びです。

◇やすらぎ通信

皆様とのコミュニケーションの一つとして年
に四回『やすらぎ通信』を発行しています。

○高度一万mからの景色を見ながら……

去る五月十八日、善光寺旅行会で善光寺先代

様のご供養の為、永平寺にお参りに行きました。
帰路の飛行機では、運よく窓際に座れ、一時間
以上空の上からの景色を眺めることが出来まし
た。遥か彼方に小さくなっていく建物や町並み、
そして山々。この眼下の地で多くの人々が生活
をしているんだなあという感覚、そして私もそ
の中で暮らしているのだという当たり前のこと
を思いました。

いつまでもどこまでも似たような景色が広が
る中、機内には「羽田空港周辺に雷雲があるた
め飛行機は知多半島周辺で待機している」との
アナウンスが流れました。どおりで時が止まっ
たかのように同じ景色がつづいていたのです
ね。でもおかげで上空一万mからの景色をなが
く見ることができ、とても感動的でした。

このような小噺があります。

江戸時代、信州の山奥の炭焼きの職人と、佐渡の漁師がそれぞれ別々に、浅草の観音様へお参りをして、偶然旅館で相部屋となった時のお話です。食事の席で盃を交わし、四方山話を重ねるうちに、「お日様はどこから上がってどこに沈む」という話になりました。

信州の炭焼きは「山から上がって山に沈む」



と言つて譲りません。佐渡の漁師は「海から上がって海に沈む」と言つてこちらも譲りません。それぞれの生きてきた環境が真実であります。互いに引かず、どうしても話がまとまりません。仕方なく仲裁に入った旅館の番頭に聞くと「屋根から上がって屋根に沈む」と言つてこれまた譲らないといったお話です。

それぞれが正しいと思ひ込んでいるものが全てでありましょうか。

永平寺を開かれた道元禪師は、「(我々は)参学眼力のおよぶばかりを見取会取するなり」と言われ、「のこりの海徳山徳おおくきわまりなく、よもの世界あることを知るべし」と説かれます。

私たちは、学び学んで眼力の届く限りを見取り会得するのではあるが、森羅万象にある真の姿を知るためには、目に見える形のほかに、残

りの形相は多く極まりなく、そのように十方世界が成り立っていることを知らねばならないと示されております。

〔正法眼蔵〕現成公案

上空からの眺めは日常世界と異なるものの見方を教えてくれました。それは、ちつぽけな自分の世界で悩み、些細なことで傷つけあつてしまふような生活から離れるための視点でもあります。謙虚に大きな心、捉われのない心でもものを見ることが他人と自分を大事にしていく生き方であります。仏教ではそれを「智慧」と呼びます。自分の損得や感情を差し挟まないであるがままにものを見る力です。

高度一万メートルからの景色を見ながら、違った角度から今の生活を見つめ直してみなさいと道元禅師や先代様にいわれている気がした永平寺からの帰り道でした。

(平成29年6月VOL.46より)

◇やすらぎ寺子屋

月に一度開催しているやすらぎ寺子屋では、椅子坐禅や法話の他にお茶を飲みながらの雑談も楽しみの一つです。

最近の話題からひとつ……。

気軽に始められる趣味で、なかなか奥が深い短歌や川柳。新聞の投稿欄も大賑わい。伏見所長の奥様静子様もその魅力にひかれたお一人。先日読売新聞に秀逸にて掲載されました。

皆様の作品も募集しています。「これは！」という作品が出来ましたら是非お送り下さい。

短歌

・主なき里の雨戸を開け放つ

飛石の先に草を抜く母

柏市 伏見静子

評…草を抜く母の姿がほんとうに見える感じがする。母のまぼろしとか、見えるようだと間接的に言わなかったのがいい。「飛び石の先」と視線を定めたのが効果的だ。

(平成二十九年九月五日)

よみうり文芸 花山多佳子選

(今は誰も住んでいない実家に帰り、空気の入れ替えの為に雨戸を開けたのでしょうか。庭に落とした視線の先に亡き母の姿……)

よみうり時事川柳

- ・籠池の水汲みだすも底見えす
- ・投稿の腕も上げたい値上げ分
- ・ピーポの音が停まると怖い闇

また、こんな作品も話題になりました。

○18歳と81歳 (作者不明)

道路を暴走するのが18歳

道路を迷走するのが81歳

心がもろいのが18歳

骨がもろいのが81歳

偏差値が気になるのが18歳

血糖値が気になるのが81歳

恋愛に溺れるのが18歳

風呂で溺れるのが81歳

東京オリンピックに出場したいと

願うのが18歳

東京オリンピックまで生きたいと

願うのが81歳

.....

○つもりちがい十ヶ条 信州元善光寺

高いつもりで低いのが教養

低いつもりで高いのが気位

深いつもりで浅いのが知識

浅いつもりで深いのが欲望

厚いつもりで薄いのが人情

薄いつもりで厚いのが面の皮

強いつもりで弱いのが根性

弱いつもりで強いのが自我

多いつもりで少ないのが分別

少ないいつもりで多いのが無駄

.....

○ほけたらあかん長生きしなはれ

年を取ったら出しゃばらず

憎まれ口に泣き言に

他人のかげ口愚痴いわず

他人の事は褒めなはれ

聞かれりや教えてあげてでも

知ってることでもしらんぶり

いつでもアホでいるこつちや

勝ったらあかん負けなはれ

いずれお世話になる身なら

若い者には花もたせ

一歩下がってゆずるのが

円満にいくコツですわ

いつも感謝を忘れずに

どんな時でもへえおおきに

お金の欲を捨てなはれ

なんぼゼニ、カネあつてでも

死んだら持つていけまへん

あの人はええ人やつた

そないに人から言われるよう

生きているうちにバラまいて

山ほど徳をつみなはれ

というのはそれは表向き

ほんまはゼニを離さずに

死ぬまでしつかり持つてなはれ
人にケチャといわれても
お金があるから大事にし
みんなベンチャラいうてくる
内緒やけどほんまだつせ
昔のことはみな忘れ
自慢ばなしはしなはんな
なんぼ頑張り力んでも
体がいうことききまへん
あんたはえらいわ、わしゃあかん
そんな気持ちでおりなはれ
わが子に孫に世間さま
どなたからでも慕われる
ええ年寄りになりなはれ
ボケたらあかんそのために
頭の洗濯いきがいに
何か一つ趣味持つて
せいぜい長生きしなはれや



※加賀自生山那谷寺（真言宗）の住職の言葉、
または大阪・天牛新一郎の言葉との説があり、
それを松下幸之助が見て気に入り、色紙に書いた
ことから有名になったといわれる。（遠藤実
作曲・杉良太郎さん歌でCDが出ています）

◇善光寺永代供養墓◇

「やすらぎの碑・やすらぎの塔」

1、合葬 ※やすらぎの碑に埋葬。

単独型 永代供養料 五〇万円

夫婦型 永代供養料 八〇万円

三十二年間骨壺にて安置し、以降やすらぎの塔に合祀

2、合祀 ※やすらぎの碑に埋葬。

一 霊 永代供養料 三〇万円

十年間骨壺にて安置し、以降やすらぎの塔に合祀

3、合祀2 ※やすらぎの塔に直接合祀。

一 霊 永代供養料 二〇万円

合同合祀供養祭にて合祀

○ご希望の方には石版に一名づつ墓誌を彫刻致します。

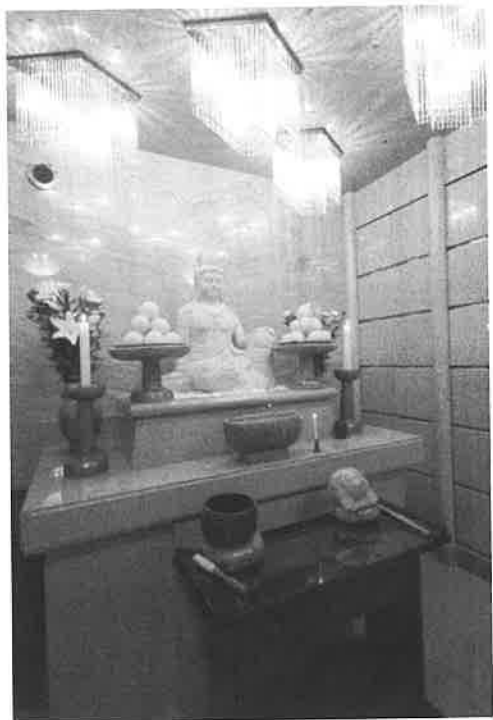
(有料・三万円)

○他霊園からの改葬など複数名の契約(三霊以上)については金額のご相談も承ります。

○生前申込も受け付けております。

○詳細はやすらぎの郷霊園管理事務所までお問い合わせください。





下ニ大本山永平寺の一葉観音
左ニやすらぎの碑納骨室の一葉観音



〔目的〕

仏教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA 禅センター)
"923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A"
2. Zen Mountain Center of NewYork (NY 禅センター)
"Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A"
3. Zen-Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)
"Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deuchland Germany"
4. WatPaknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand"
5. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成30年4月より1年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文（次項による）
 - 論題
 - ①これからの国際興隆と仏教の役割
 - ②世界平和と仏教徒の誓願
 - ③留学僧として私はこれを学びたい
 - ④異文化の中で仏教を学ぶいずれか一題を選ぶこと A4判 2,000字以上
(原稿用紙5枚以上)
2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

〔募集人数〕

平成30年度若干名

平成29年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成30年1月11日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒234-0053 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 31 回 生

横浜善光寺 留学僧募集

平成30年度・2018

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

毎月の催事

坐禅会

善光寺では毎月第一日曜日の早朝六時から、第四日曜日午後二時から坐禅会を行っております。

早朝坐禅の後は、朝のお勤めをし、その後、禅寺の作法に従って、お粥を召し上がっていただきます。

午後の坐禅会は、坐禅を二炷。そして、読経・法話。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方のご参加もお待ちしております。お気軽にご参加下さい。



平成30年 善光寺坐禅会 年間予定表

■早朝参禅会 毎月第1日曜日 朝6時から

1月7日(日)	7月1日(日)	午前 5:45 集合 6:00～ 坐禅・読経 7:30～ 朝食(お粥) 8:15 解散
2月4日(日)	8月5日(日)	
3月4日(日)	9月2日(日)	
4月1日(日)	10月7日(日)	
5月6日(日)	11月4日(日)	
6月3日(日)	12月2日(日)	

早朝参禅会参加ご希望の方は、前日午後7時までにご連絡下さい。

■日曜坐禅会 毎月第4日曜日 午後2時から

1月28日(日)	7月22日(日)	午後 2:00～ 準備・指導 2:20～ 坐禅 3:00～ 経行・小休 3:10～ 坐禅 4:00頃 解散
2月25日(日)	8月26日(日)	
3月25日(日)	9月23日(日)	
4月22日(日)	10月28日(日)	
5月27日(日)	11月25日(日)	
6月24日(日)	12月23日(日)	

参禅ご希望の方はご連絡下さい。当日でも結構です。

■朝いち禅 毎週月曜日～金曜日 午前6時30分から7時30分迄、坐禅と読経
禅寺の朝は、坐禅と読経から始まります。「朝いち禅」はお坊さんと共に勤めする朝一番の修行です。

それぞれ日程は寺の行事によって変更があります。

服装はゆったりとしたもの。靴下は履きません。

時計やアクセサリは、はずして下さい。

参加費はすべて無料です。

写経会

お写経は、自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の追善、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。

善光寺では月一回、左記にて「写経会」を開催中です。

どうぞご参加ください。

【日時】 毎月第四金曜日

午後二時より一時間半

【場所】 善光寺不動殿

【読経】 「般若心経」を全員で看読

【写経】 引き続きお写経「般若心経」

【指導】 永島俊子先生

【費用】 無料

平成30年

善光寺写経会年間予定表

1月26日（金）	7月27日（金）
2月23日（金）	8月24日（金）
3月23日（金）	9月28日（金）
4月27日（金）	10月26日（金）
5月25日（金）	11月23日（金）
6月22日（金）	12月28日（金）
午後	
2：00～	読経「般若心経」
2：10～	写経
3：00～	読経
3：30	解散

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加ご希望の方は準備の都合上、ご連絡下さい。当日でも結構です。

講座

「論語」からのお話

講師：東郷 敏先生

平成 30年	1月14日（日）	7月8日（日）	毎月第2日曜日 午後2時半～3時半
	※2月10日（土）	8月はお休み	
	3月11日（日）	9月9日（日）	
	4月8日（日）	10月14日（日）	
	5月13日（日）	11月11日（日）	
	6月10日（日）	12月9日（日）	

※2月は土曜開催です。

参加費は無料です。聴講ご希望の方はご連絡下さい。



書道教室

毎月第1・第3土曜日 午後1時～3時

【会費無料】（お手本代 ¥480 /月）

指導：吉田翠華先生

※参加ご希望の方は、ご連絡ください。



ご詠歌教室

梅花流詠讃歌を住職とともに学びませんか？

現在、下記の予定まで確定しております。

3月以降は講師老師の予定と参加者の人数によって調整致します。

善光寺ホームページをご参照いただくか、直接お寺へお問い合わせ下さい。

皆さま奮ってのご参加お待ちしております。

一緒に声を出してお唱えしましょう。

1月 1月24日（水）午後2時～4時迄

2月 2月15日（木）午後2時～4時迄

3月 3月1日（木）午後2時～4時迄

講師 梅花流特派師範 渡邊清徳老師（栃木県高德寺副住職）

参加・体験ご希望の方は1週間前迄にご連絡下さい。

梅花流詠讃歌とは、お釈迦さまや祖師方を讃え、ご先祖さまを敬うところを旋律にのせてお唱えをするものです。その旋律はやさしく穏やかな曲調で、唱えやすく安らかなところが生まれ新たな感動がわいてきます。

華道教室

毎月第1・第3火曜日 午後2時～3時

【参加費無料】お花代として、毎回 ¥1,000 ご準備ください。

指導：本多輝隆 先生

フラワーデコレーター協会本部講師

池坊正教授一級師範

華道教室「花塾」(港南区丸山台)



※参加ご希望の方は、一週間前までにご連絡ください。



お申し込み・お問い合わせ先

善光寺 横浜市港南区日野中央一―十二―九

(〒113-0053)

電話 話：〇四五―八四五―一三七―一

FAX：〇四五―八四六―二〇〇〇

Eメール：info@zenkouji.net

URL：http://zenkouji.net

やすらぎ寺子屋

～ほとけに親しむ～

やすらぎの郷霊園では、毎月一回週末に「やすらぎ寺子屋」を開催しています。

お釈迦さまや祖師方のお言葉に触れ、共に学びあい、仏の教えを日常に取り入れて心やすらかな日々を過ごす。そのきっかけになればと始めたものです。約一時間の内、前半は椅子座禅、後半は法話。その後、茶話会となります。お気軽にお問い合わせ下さい。

毎月第一日曜日 午後2時～3時

場所：横浜やすらぎの郷霊園管理事務所二階

横浜市旭区上川井町1749-1

電話045-924-0210 FAX045-924-0239

Eメール info@y-yasuraginosato.jp

URL y-yasuraginosato.jp

参加費は無料です。

詳しい日程は上記霊園管理事務所へお問い合わせください。



「論語からのお話」 参加者の声

「縁をいただいて

田中愛子

中学三年になった時、週に一回、漢文の授業がありました。杜甫、李白の詩を学ぶ中で、孔子の「恕」という言葉に出会いました。

「己れの欲せざることに人にすることなかれ」

多感な年頃であったこともあり、以来私の座右の銘の一つになりました。過ぎこしの七十数年、山、坂につまづいたこともありましたが、その折々に格言、箴言が私を助け、生きてゆく指針になってくれました。

「春風を以て人に接し秋霜を以て自ら慎む」

儒牛（無用の用）もある時期私を支えてくれました。曹洞宗とのお縁もいろいろありました。

幼少期、祖父母の家に預けられていた私は、いつも祖母の後について「のの様」と言いながら神さま仏さまにご飯やお水、お茶を供えています。祖母は信仰心の篤い人でした。

お坊様の唱えられる「なむからたんのー（南無喝囉怛那）、とらやーやー（哆囉夜耶）」が耳に残っています。

年を重ね、やがて夫の転勤先で駒澤大学の聴講生となり、宗教学、中国思想史の講義も受けました。孔子、孟子、莊子、荀子、老子等の禁帯出の本を大学のご好意で特別に貸出を許されて読みました。大半のことは忘れてしまいましたが、いくつかのことは時に思い出します。

父方、母方ともに曹洞宗。そして現在、田中

の墓は日野霊園にあることから、善光寺様とご縁をいただいで坐禅や写経、論語の勉学に励んでいます。



論語の第一回講義の時は大雪でしたが、先生は大阪から来られるのだからと、バスの運行がない中、上大岡から善光寺まで雪に足をとられながらも一生懸命歩きました。私は檀家ではありませんが、善光寺様はあたたかく迎え入れて下さいました。そして教室では東郷先生の人生経験豊富で豪放磊落なお人柄に触れました。

私は脳の老化が進み、せつかくのお教えも忘れてしまいますが、最近、海馬も磨くことにより再構築されるということを知り、脳の活性化をはかると共に、「恕」を生涯の座右の銘として貫きたいという思いで講座に参加させて頂いております。今後ともよろしくお願いたします。

論語すこいです

越石洋子

いつも論語のお話楽しみにしています。

先日会った友達との会話で「最近なにかやっ

てるの？」なんて話が出て、

私「うーん、体が弛んじやってすごいからスポーツクラブ。運動すると、すっきりするけど行くのめんどう（笑）。それと月一回論語のお話聴きに行ってる！」

友「えー、論語？」

私「そうそう、子曰くっていうやつ」

友「へえ、すごいねえ」

私「論語ってすごいんだよー！」

考え方、生き方の勉強って感じかな」

そうです、論語すごいです。

体幹がしっかりしていると体がぶれないように、論語を勉強していると、考え方、心を鍛えている感じがします。

先生の話はよく脱線します。それがまたすごく面白い！ 聴いている私たちを巻き込んで座談会が始まり、大笑い。夫は、ある日突然倒れ、どん底の中、回復に二人三脚。不測の事態に夢

も笑いも幸せも飛んでいってしまいました。そんな時学習会に参加。笑えない日々が笑えるようになってきたのです。以来皆勤しています。まさしく「わろてんか」の世界に引き込まれ新しい歩みを二人で共有出来るようになったのです。

私は、皆さんと過ごす論語のお話が大好きで、大切な時間です。その日は、お墓参りをして、お釈迦様、ご先祖様に手を合わせ、私の大事な人を助けていただいたおびんづる様にさわって、論語を聴き、終わりにお菓子をひとつだけ貰って帰る。感謝感謝です。

「WORK」と「LABOR」の違い

濱中康史

私の仕事は刑務官です。刑務官の仕事とは罪を犯した受刑者の改善更生であり、その一環で受刑者に刑務作業をさせるための色々な工場が

刑務所の中にあります。それぞれの工場に刑務官がいます。私は昨年まで七十〜八十名の人数を担当する工場担当を十七年間やっていました。刑務所の中で工場を担当する刑務官は、直接受刑者と接する機会が一番あり、日々その生活指導、改善更生に向けた助言をすることが主な役割です。

工場では毎日受刑者全員が整列した際に担当からの訓示があります。なぜ訓示が必要かと言うと、工場の中には色々な人間がおり、強い者、弱い者、わがままな者、人の嫌がることをする者など様々な人間と集団で生活する中で、工場担当者は、喧嘩や論争などがないように指導するため訓示をすることが必要なのです。

私が論語と出会ったのは、ある人から「和し同ぜず」という言葉を聞いて、これは何の言葉なんだろうと思ひ、調べてみたことからです。調べると論語だったことがわかりました。そこ

から興味が湧き、論語の本を手にとるようになりました。そのような中、母から善光寺さんで東郷先生の論語のお話があると聞いて、聴講させていただくようになりました。

私が訓示でよく話すのは「恕」と「仁」についてです。「おもいやり」は集団生活をする上でなくてはならないことであり、相手の立場に立つこと、自分一人でいるわけではないということをお話します。そのような話をしていると、受刑者も興味が湧いてくるようで、論語の本を購入する者が増えてきました。

私が月に一回、論語の勉強に行っていることも話したことがあり、東郷先生のお話で聞いた「WORK」と「LABOR」の違いについて引用させていただいたことがあります。みんな返事がよくなりました。

自分自身のことでも、仕事をする上でも、東郷先生のお話はとても勉強になっています。これ

からも勉強をしていくのでご指導よろしくお願
いします。

変化する自分に巡り会った瞬間

轟木完次

「論語からのお話」に初めて参加してから、
二年半となりました。

最初の印象では難解だと思っていた論語を、
難しい言葉を使わずに、初めて論語に触れる者
にもわかりやすく、かつ事例を示しながら解説
されるので、「これは勉強する機会だ」と思い
ました。

論語を習い始めてから一年が過ぎた頃、横断
歩道を渡る時、止まってくれた車の方に礼をし
ながら渡っている自分に気が付きました。些細
なことですが、これらの積み重ねが論語を勉強
している効果といえるのではないかと思い、少
し嬉しく思ったことを覚えていきます。これは大

きく変わった自分自身に巡り会った瞬間でした。

未来と自分は変えられる

山田信子

平素よりお世話になっております。

良い日もあれば、つらい一日もあります。ふ
とそんな時に思うのは論語の学習のことです。

「あと何日で論語の教室で友達に会える」と。
心の通う仲間です。楽しい話をし、笑顔で帰っ
て行く時、幸福を感じます。家にいても何をす
るでもなく、一人部屋にこもっているだけ。

「道理を知っていても実行が伴わない」感
じ。

「過去と他人は変えられない」

深く心に刻みます。未来と自分を変えられる
……感謝の心はいつも忘れないように思ってい
ます。まだまだ未熟な自分であること。

でも、東郷先生のお陰です。論語論語と毎日

思い出し、やっと心がしずまってきました。今は、使わない物は全部捨てています。人にあげたりして喜んでいただいています。

心の隅にいつも伊勢神宮を思い出すと心がゆるみます。小六の時に遊びに行つた思い出です。いつまでもいつまでも大切にしたいと思います。

心に栄養を与え続ける

竹達笑子

「論語ですか。難しいでしょうね。」

漢文も読んだことのない私には、所詮無理な話と、三年前この講座に友人から誘いを受けた時の心境でした。友人の熱心さに一度くらいはおつきあいで参加しようと、軽い気持ちでした。

最初は先生の話を身構えて聞いておりましたが、興味ありませんでしたが、講義が進むにつれて、その世界に引き込まれていきました。

古い大昔の書である論語が現代に通じ、それ

上に今失われつつある人間性を掘り起こす、貴重な教材になっているとは、「目から鱗が落ちる」とはこのことだと痛感したのです。

はじめの五分間の瞑想で雑念を払い、集中力を高めての勉強です。講座のタイトルである「論語からのお話」そのまま基本に忠実でありながら身近な問題を絡ませながらの先生の巧みな話術に時間を忘れます。

「論語読みの論語知らず」の諺がありますが、この講座では一度も「論語を読破しましょう」と言われたことはありません。論語の心を教えて頂きます。

私はいまだに一節もすらすらと読めるまでに到っておりませんが、少なくとも教えて頂いた論語の心は理解できます。心に栄養を与え続ける為にもこれからも参加して勉強を続けたいと願っております。

育英会寄付者

■平成二十九年 度

港北区 瀧澤 武雄殿
 港南区 南 有里殿
 長野県 正眼院 内山款偉殿
 港南区 増山 静江殿
 世田谷区 富田 繁殿
 長野県 石黒 玄章殿
 港南区 日野石材工業協同組合殿
 戸塚区 福泉寺 岩波弘道殿
 茨木市 乗雲寺 安井隆同殿
 東京都 真清浄寺 吉田日光殿
 金沢区 太寧寺 山本浄月殿

港南区 熊谷 豊太郎殿
 都筑区 阿部 匡宏殿
 川崎市 宮田 富夫殿
 柏市 伏見 邦弘殿
 平塚市 山口 義男殿
 港南区 鳥居 石材 店殿
 港南区 山下 石材 店殿
 港南区 米陀 石材 店殿
 港南区 清水 石材 店殿
 台東区 翠雲堂 山口肇殿
 金沢区 (株)せんざん 山泉篤殿
 緑区 豊島 節夫殿
 町田市 鈴木 幸雄殿
 新宿区 (株)東亜建設工業殿
 高槻市 東郷 敏殿



戸塚区	富士哲也殿
京都市	多福院 島崎義孝殿
港南区	倉持 光殿
福知山市	立正佼成会福知山教会 教会長 本園雅一殿
東近江市	正瑞寺 田中智誠殿
西東京市	東禅寺 中野良教殿
品川区	桐ヶ谷寺 黒田純夫殿
ブラジル	大観寺 スターヘル固成殿
豊島区	新井 マサエ殿
港南区	円谷喜只殿
品川区	桐ヶ谷寺内 山本陽道殿
墨田区	福巖寺 新美昌道殿
新潟県	伊藤 康 心殿
小田原市	成願寺 山口晴通殿

文京区	胡建明殿
港南区	濱中幸子殿
旭区	半澤範之殿
磯子区	鈴木照子殿
栄区	野辺義文殿
戸塚区	野辺京子殿
江東区	西谷 榮殿
港南区	桂川正克殿
港南区	池田耕三殿
南区	大森 キクエ殿
港南区	森 ふじ子殿
富山県	浅香 恵殿

ありがたいご寄付を賜り、

心より厚く御礼申し上げます。





読者のために

ゆっくり拝読

大乘寺山主 東隆眞老師
石川県

冠省 昨夕帰山いたしました。『成寿』第四十六号拝受いたしました。ありがとうございます。させていただきます。衷心より御礼申し上げます。これからゆっくり精読させていただきます。御山内御一統様の御健勝をお祈りいたします。

育英生決定のお知らせご送付いただきありがとうございます。二名の人は今後武志老師の意思をついで仏法興隆の

ために大にお努め頂きたいと願っております。

当山参拝の記事有難く

清水寺貫主 森清範様
京都市

平素は当山に対し格別のご懇情を頂き、尚その上此度『成寿』冬号を御恵贈下され誠に有難うございます。当山の貴重な蔵書として納め、教学の糧とさせて頂きたく寸書もつて御礼申し上げます。当山参拝の記事有難く拝見させて頂きました。

台掌

いつの間にか十三年

神奈川県
宮本延雄先生

謹啓 寒中御見舞い申し上げます。御山内御一統様ご多忙の日々と存じます。

昨年暮れには貴寺季刊誌『成寿』第四十六号貴寺二世中興大圓武志大和尚十三回忌法要特集号を御恵贈賜りまして衷心より感謝いたしております。時は流れいつの間にか十三年の月日が過ぎてしまいました。愚生も法要にはお参りさせて頂きましたが、在りし日の大方丈老師のお姿が脳

裏に浮かびしばらくは往時を想い起こして偲び合掌いたしました。

貴寺の興隆と檀家様の平穩を御祈念申し上げ寸楮遅ればせながら御礼申し上げます。

合掌

思い出深い『成寿』

神奈川県
佐々木宏幹様

『成寿』四十六巻を拝受いたしました。先代の武志老師、現董の博志老師のお写真と文章を目にし、懐かしさがこみ上げてきました。また何度か講話におうかがいした折に親

しく接して下さった筆頭総代の熊谷豊太郎氏の百歳のお写真を拝見し、「仏力」を感じました。

善光寺様の一層の御発展を御祈念いたします。

合掌

一年の締めくくり

福島県
円通寺住職 吉岡棟憲老師

一年を締めくくる時、『成寿』四十六号を届けていただきありがとうございます。これからゆつくりと拝読させて頂きます。

確かにお受け取りしたこと

をお伝えしつつ、お心づかいに深く感謝し心より御礼申し上げます。

ありがとうございます。

時節柄ご自愛專一に

常林寺 林秀頼老師
東京都

前略 このたびは『成寿』をご恵送賜り暑く御礼申し上げます。

時節柄ご自愛專一にご健勝を祈念申し上げます。

良い学びを得ました

松庵寺 渡辺紫山老師
秋田県

拝復 『成寿』いつも有難く拝読しています。清水寺の貫主様のお話がとってもいいですね。ブランド品は一流品、これは「いっぺん流れた品」(笑) 上品な笑いと共に、悉皆成仏はすべてのものに命が宿るといふ道元禪師の教えに通じる表現。
良い学びを得ました。博志老師の御法体益々堅固を祈ります。

師資相伝のお姿に感服

石黒玄章師
長野県

冠省 『成寿』四十六号拝受致しました。毎号楽しみにしております。ありがとうございます。

今号も内外に伝承され、師資相伝のお姿に感服いたしました。

山内ご一同様ご健康に益々のご活躍をされることを祈念させていただくと共に小生も先代さまの「宗祖を通して釈尊に還る」を胸に精進していく所存です。

御健康と御活躍を祈念

早川祥賢様

前略 『成寿』第四十六巻
を賜り大変有難うございました。
厚く御礼申し上げます。

御任職様はじめ皆様の一層
の御健康と御活躍をお祈り申
上げます。

早いもので十三回忌

東京都
磯村啓子様

拝復 『成寿』第四十六巻
有難く拝受しました。武志先

代方丈様の十三回忌、早いも
のです。善光寺様も益々御発
展おめでとうございます。

皆様よいお年をお迎え下さ
い。

近況をご報告

ニューヨーク
伊藤 博様

季節のご挨拶申し上げます。

2016年も終わろうとし
ていますが、皆様ご健勝にて
お暮らしの事と思えます。
我々は多忙な一年でした。
2015年の冬休みを利用し

て一人で西アフリカのニジェ
ールに飛び、そこからバスで

国境を越え、友人のいる隣国
のブルキナファソに二週間旅
しました。片道十二時間のバ
スの旅では見慣れているアフ
リカの土漠や田舎村を窓から
見て楽しみました。

アフリカ人の知人はプラッ
ツバーグ大学の同僚で、母国
の地元の若者のために職業高
校を独力で建てています。未
完成の教室二つの建物を見て
きましたが、彼の努力には感
激しました。日本大使にも表
敬訪問し、経済援助について
や比較的治安の良いことをう
かがいました。

ところが、帰米して二週間
後に僕の泊まっていたホテル

の近くの主に外人が泊まるホテルとレストランに地元アルカイダが押し入り、三十九人も殺害したとの報道が入り、びくり仰天しました。この件もあつて、百六十以上の国を回った今、この辺で世界旅行に終止符を打つことにしました。もつとも、パリやロンドンに行つてもテロ事件はありませんが。

夏、東京に行きました。七月の総選挙で安倍政権が大勝したのであと三年以内に憲法改正があると思ひ、毎日最高裁判所の図書館に二人で通ひ、日本国憲法の改正の資料をあつめてきました。その中

間報告を明治大学のセミナーでしました。

アメリカの長すぎる選挙も思わぬ結果で終わり、一段落しましたが、これからどうなるか気にかかります。温暖化といわれながらもここ北国にはちゃんと冬が来て、雪も降り、かなり寒くなつてきました。うっすらと残る雪に各家々のクリスマスライトが反映してきれいです。どうぞ楽しいクリスマス、そして良いお正月をお迎えください。

博志方丈様、毎回『成寿』送っていただきありがとうございます。お母様によろしく。

胸があつくになります

千葉県
藤田正子様

二十八年もあと数日で終わりと思つていました今朝、又もやうれしさと驚きが私の胸を一杯にしてしまった。この『成寿』がポストに入つておりました。すぐさま開いて見えますと、表紙の絵はなつかしい「阿修羅」像……。なんといい美しいお姿、お顔……少なくとも長年絵を描き続けている私にとりましては師の好きだったこの作品はいつ拝見しても胸がつまります。昨

年は黒田武志和尚様の十三回忌であったとのこと。師と、亡き武志和尚との楽しげなお二人のお姿がありありと目に浮かび、胸があつくになります。今年も又、私なりに皆様を見習い、元気に明るくがんばって生きて行きたいものとおつくづく感じました。ありがとうございました。

磁気が触れている錯覚

神奈川県
小泉孝子様

前略 先日の新年祈禱会の際には、沢山のお心尽くしを心身共に頂き有難うございま

した。

勇壮な獅子舞に息を呑み、愛嬌たっぷりのおかめひよつとこ踊りの滑稽さに皆さん嬉しそうで楽しそうで、幸せ一杯の大笑いで手のひらが赤くなる程の拍子で喜びました。和太鼓が鳴り出すと、和服の帯が肋骨に当たっている所など磁気が触れているのかなと錯覚する程ビリビリと伝わって来ますので、深呼吸をしてみたりで体中の邪気が祓い退けられた気分でした。そしていよいよ待望の福引きです。一月二日に近所の諏訪神社に参拝し、申、酉年は騒がしいとか賑やかとの事、しつかり

と地に足をつけ落ち着いて転ばないように「とりつとりつ」と過ごせますようにと願ったことでした。ところが、頓知の休憩さんどころか、東郷先生の一級さんにマインドコントロール（これは内緒です）されたかの様に「金賞」を抱えて鳳凰が舞い降りて来た様でした。「305」番で3身、0IIを、5II護と勝手に解釈して不動明王様のご加護かもしれないと悦に浸ってました。胸の高鳴りのどきどきも通り越し、頭のとサカにのぼってしまい、客殿に置いた荷物場所が分からなくなり、野鳥の「かけす」みたい。皆

さんにご迷惑をおかけした次第です。

一気に「天、空、地」の鳥を見てしまったようで私の「おめでたさ」には呆れます。途中で前平方丈様にもお会い出来、何よりでした。帰宅し仏壇に報告し、想い出に残る素晴らしい年頭でした。善光寺様のお陰と、心から感謝とお礼と申し上げます。思いのままペンを走らせてしまいました。お許しくださいませ。時節柄御自愛くださいますように。

草々

喜んで彼の世に

谷口 武様
神奈川県

黒田方丈様

その節は大変お世話になりました。

谷口なかも喜んで彼の世に行ったと思います。

前平方丈宜しくありがとうございます。

バックナンバーも大切に

浅香 恵様
富山県

前略 『成寿』第四十六巻をおくつていただき、ありが

とうございました。この二十一年のバックナンバーはすべて大切に持っています。武志大和尚様十三回忌法要とは、年月の流れるのはほんとうにはやいものですね。

私は平成元年より「誕生日にはありがとうをいいますよ」のリーフレットを配布していますので、京都音羽山清水寺貫主様の法話を身にしみて読ませていただきました。これからもよろしくお願いたします。

《絵手紙》

越石哲永様

善光寺留学僧育英会第三期
生です。

脳梗塞を患うも善光寺講座
「論語からのお話」に出席さ
れるなど心身のリハビリに努
め、毎月、心のこもった絵手
紙を送って下さいます。



編集後記

○成寿四十七号お届け致します。

今号は善光寺留学僧育英会第三十回記念交歓会を特集致しました。改めて発願者黒田武志前理事長の誓願、育英会の意義を感じ、育英会を支えて頂いている多くの皆様方への感謝の念を篤く致しました。今後ともご指導ご協力を賜りますようお願いしてお願い申し上げます。

○新年祈祷会や節分会、記念交歓会などの舞台設置を(株)板橋様にお手伝いを頂きました。いつもながら手際よさに感心し、有り難い気配りに心より感謝申し上げます。

○大本山永平寺への参拝。山奥に建てられた伽藍の雄大さに驚き、若い雲水さんのキビキビとした身のこなしに感心し、修行道場ならではの凛とした空気に身がひきしまる思いでした。

○御誕生寺への参拝。板橋興宗禅師より善光寺との思い出など色々なお

話を頂戴しました。有難うございました。たくさんの「ねこ」も一緒に修行中(?)。

○一斉法要では足の痛みを気にせずにご参加頂けるように本堂に椅子を増やしました。客殿のモニターも見やすいように取り替えました。皆さま喜んでお参りしていただけるようにこれからも「檀信徒ファースト」で参ります。

○お釈迦さまのみ教えを学び一緒にお唱えする「御詠歌教室」。恥ずかしがらずに皆で大きな声で歌うと気持ちもスツキリします。カラオケよりもお勧めですよ。

○東郷先生の「論語からのお話」も来年六年目をむかえ益々意気盛。日々の生活に活かせる教えを共に学習しましょう。

○各種行事にご参加される方が年々増えていきます。有り難いことです。どうぞ、生活のリズムにお寺参りを加えて、お気軽に各種行事へご参加下さい。

○昨年奉納演奏頂いた和太鼓「大元

組」。山口護持会長のご縁からの紹介。その迫力ある響きは、まさに心の邪を祓い凜とした気持ちにさせられます。来年も演奏予定。皆さま是非奮ってご参加下さい。

○一斉法要の開始時間が変更になりました。毎回午前の部は午前十時半開式となります。

★春・秋彼岸やお盆のご供養で、一日二回ある場合も午前は十時半、午後は二時(従来通り)の開式です。

★新年祈祷会、平成三十年一月九日(火)午前十時半より厳修。

成寿 第四十七巻

平成二十九年十二月十日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央二丁目

十二番九号

電話〇四五(八四五)一三七一

FAX〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 (株)中外日報社





横濱善光寺